北海道の外来種リスト

― 北海道ブルーリスト 2010 ―

平成22年6月

北　海　道

目　　次

１　外来種リスト作成の背景と目的 ―――― １

２　外来種リストの選定について ―――― ２

（１）選定の体制及び経過 ―――― ２
　ア　検討体制 ―――― ２
　イ　協力体制 ―――― ３
　ウ　検討の経過 ―――― ４

（２）選定の考え方と方法 ―――― ４

（３）リストの分類 ―――― ６

３　北海道ブルーリスト2010（選定結果） ―――― ７

（１）概要 ―――― ７

（２）カテゴリーＡ１～Ａ３のリスト ―――― ８

（３）各分類群毎のリスト ―――― ９
　ア　哺乳類 ―――― ９
　イ　鳥類 ―――― １０
　ウ　爬虫類 ―――― １０
　エ　両生類 ―――― １１
　オ　魚類 ―――― １２
　カ　昆虫 ―――― １３
　キ　昆虫以外の無脊椎動物 ―――― １５
　ク　植物 ―――― １６

（４）選定種の解説 ―――― ２８

１　外来種リスト作成の背景と目的

（１）北海道ブルーリスト2004（2004年3月作成）

野生生物が本来の移動能力を超えて、国外又は国内の他地域から人為によって導入された種が地域固有の生物相や生態系にとって大きな脅威となっている問題、いわゆる「外来種問題」が、大きくクローズアップされてきている。

地球上に存在する生物は、3000万種を超すともいわれているが、それらの多様な生物が相互に関わり合いながら、長い年月をかけて地域固有の生物相を形成しており、私たちの暮らしも、その生物多様性を基盤としていることから、外来種によって、地域の生物多様性が損なわれることは、自然と人に対する大きな脅威となっている。

国際的な動きとしては、1992年に「生物の多様性に関する条約」でも、締約国の措置として、「生態系、生息地若しくは種を脅かす外来種の導入を防止し又はそのような外来種を制御し若しくは撲滅すること」が定められ、我が国においても、2002年３月に「新・生物多様性国家戦略」を関係閣僚会議で決定し、外来種問題を生物多様性の危機の一つとして掲げるとともに、「外来種問題」に対応するため新たな法整備の検討も進められていた。

また、本道においては、ペットとして飼われ捨てられたアライグマが道央圏を中心に生息域を拡大し、生態系への影響や農作物等の被害をもたらしたり、ブラックバスの放流が確認されるなど、外来種は本道でも大きな問題となっていた。

このようなことから、道では、「北海道の外来種リスト」（北海道ブルーリスト2004）を作成し、種毎に導入された経緯や生態学的特性、その影響などを取りまとめ、本道における外来種の実態を把握し、関係機関、団体等が対策を行う上での基礎資料とすることとした。

（２）北海道ブルーリスト2010（2010年6月作成、北海道ブルーリスト2004を改訂）

近年、外来種問題は、一層クローズアップされてきており、「外来種問題」に対応するため2005年６月には、「特定外来生物による生態系等への被害の防止に関する法律」（外来生物法）が施行され、特に問題の大きな外来種である「特定外来生物」について、運搬や飼養等の原則禁止、防除の推進などが規定された。

また、2008年６月には、「生物多様性基本法」が施行され、生物多様性を保全するため、外来生物等による被害の防止にかかる国の措置等も定められた。

また、これらの動きと前後して、関係機関や市民団体等による防除活動が活発化するとともに、外来種の情報の蓄積なども進んできた。

こうした背景を踏まえ、道では、外来種問題への道民理解を深めるとともに、道はもとより関係機関・団体等が行う外来種対策の推進に資するよう「北海道ブルーリスト2004」を改訂し、「北海道ブルーリスト2010」を作成した。

当リストでは、リストに掲載する外来種の追加、削除を行うとともに、従来のカテゴリー区分（種毎に外来種の導入や定着の状況や影響の有無などによりＡからＫに区分）に加え、カテゴリーＡに区分された外来種を「対策の優先度」に応じて、新たにＡ１～Ａ３に細区分した他、ホームページで公表する掲載種の解説（個票）では、被害の実態やおそれなどをより具体的に記載するとともに「特定外来生物」の指定や「日本の侵略的外来種ワースト100」（日本生態学会）の選定状況を記載するなど内容も充実させている。

ブルーリストとは

希少野生生物のリストが「レッドリスト」とされていることを踏まえて、ブルー（青色）とレッド（赤色）を対照的に捉え、外来種のリストを「ブルーリスト」と命名した。

２　外来種リストの選定について

（１）選定の体制及び経過

ア　検討体制

北海道ブルーリスト2010の作成にあたっては、野生生物の専門家等で構成される「北海道外来種対策検討委員会」（「検討委員会」）に加えて、各分類群毎の「専門部会」を設置し、検討を行った。

なお、「検討委員会」及び「専門部会」の構成員及び担当等は、次のとおりである。

＜北海道外来種対策検討委員会：検討委員（学識経験者）＞　　（５０音順・敬称略）

氏　　名	所属など（検討当時）	担　当	備考
阿部　永	元北海道大学農学部教授	哺乳類	座長
池田　透	北海道大学大学院文学研究科教授	哺乳類	
帰山　雅秀	北海道大学大学院水産科学研究院教授	魚類	
久万田　敏夫	元北海道大学農学部教授	昆虫	
高田　雅之	環境科学研究センター環境科学部主任研究員	情報処理	
高橋　英樹	北海道大学総合博物館教授	植物	
中田　和義	独立行政法人土木研究所専門研究員	昆虫以外の無脊椎動物	
中林　成広	北海道両棲爬虫類研究所所長	両生・爬虫類	
藤巻　裕蔵	帯広畜産大学名誉教授	鳥類	

＜北海道外来種対策検討委員会：庁内委員（道の研究職員等）＞　　（５０音順・敬称略）

氏　名	所属など（検討当時）	担　当
小野　理	環境科学研究センター環境科学部環境GIS科長	情報処理
川井　唯史	稚内水産試験場資源増殖部資源増殖科長	甲殻類
車田　利夫	環境科学研究センター自然環境部道東地区野生生物室長	哺乳類
桒原　康裕	網走水産試験場調査研究部栽培技術科長	軟体動物
古原　洋	中央農業試験場技術普及部主査(地域支援)	植物(水田)
玉田　克巳	環境科学研究センター自然環境部自然環境保全科長	鳥類
内藤　一明	水産孵化場 養殖病理部養殖技術科長	魚類
西川　洋子	環境科学研究センター自然環境部植物環境科長	植物
堀　繁久	開拓記念館学芸部 資料情報課長	昆虫

イ　協力体制

なお、前段の各委員に加えて、次の専門家の御協力もいただいた。

＜御協力いただいた方々＞　（５０音順・敬称略）

氏　名	所属など（検討当時）	担　当
赤坂　宗光	国立環境研究所環境ﾘｽｸ研究ｾﾝﾀｰNIESﾎﾟｽﾄﾞｸﾌｪﾛｰ	全般・両生・爬虫類
有賀　望	札幌市豊平川さけ科学館 学芸員	魚類・昆虫以外の無脊椎動物
安細　元啓	（株）野生総合研究所 代表取締役	昆虫
五十嵐　博	（有）ムーヴ植物設計 代表取締役	植物
池田　亨嘉	帯広百年記念館 主任	爬虫類
伊東　拓也	道立衛生研究所衛生動物科 主査	昆虫
岩崎　暁生	道立中央農業試験場環境保全部クリーン農業科長	昆虫
宇根　有美	麻布大学獣医学科病理学研究室准教授	両生類の疾病
大坪　晃輔	酪農学園大学博士課程	ペット・両生・爬虫類
岡本　康寿	札幌市豊平川さけ科学館館長	魚類・昆虫以外の無脊椎動物
小川　巌	エコネットワーク 代表	全般
金子　正美	酪農学園大学環境システム学部教授	情報処理
齋藤　和範	ザリガニ探偵団主宰	両生・爬虫類・昆虫以外の無脊椎動物
酒井　裕司	札幌市円山動物園園長	爬虫類
塩田　惇	旭川帰化植物研究会 会長	植物
沢田　健	富良野市生涯学習センター博物館係	爬虫類
杉浦　重信	富良野市生涯学習センター所長	爬虫類
原　秀穂	道立林業試験場 主任研究員	昆虫
本田　直也	札幌市円山動物園 業務職員	爬虫類
山本　秀明	札幌市円山動物園飼育展示２係係長	爬虫類
吉田　剛司	酪農学園大学准教授	全般・両生・爬虫類
－	石狩川川の博物館	魚類

ウ　検討の経過

2009年２月に開催した「検討委員会」において、ブルーリストの改訂作業を進めることを決定し、2009年度に文献調査やインターネットによるペットショップ調査等を行い、情報を収集するとともに改訂の検討を行った。

検討にあたっては、「検討委員会」において、基本的な事項等（掲載種の選定の考え方、カテゴリー区分及び細区分の考え方など）を整理した上で、各分類群ごとに専門部会を設けて、リストを整理した。

＜検討委員会等の開催状況＞

区分		担当	開催年月日
北海道外来種対策検討委員会		全体（基本的事項等）	2009.2.19、2009.12.10 2010.3.16
各専門部会	哺乳類専門部会	哺乳類	2010.2.1
	鳥類専門部会	鳥類	2010.1.29
	両生･爬虫類専門部会	両生類・爬虫類	2010.1.26
	魚類専門部会 昆虫以外の無脊椎動物専門部会	魚類 昆虫以外の無脊椎動物	2010.2.18
	昆虫専門部会	昆虫	2010.2.12
	植物専門部会	植物	2010.2.25

（２）選定の考え方と方法

北海道は、気候的には温帯から亜寒帯への移行帯に属し、周囲は豊かな海に囲まれており、その生物相は、本州以南とは異なる北方らしい特徴を有し、独自の生態系を形成していることから、北海道ブルーリストでは、国外からの外来種とあわせて、国内(道外)からの外来種も選定している。

今回の改訂にあたっても、前回リスト同様に次の４つの視点により対象生物の選定を行うこととし、次表１「カテゴリー区分（対象生物選定の考え方）」により、個別の外来種の再評価を行い「カテゴリー区分」のＡ、Ｂ、Ｃ、Ｄ、Ｅ、ｈ及びＫの種をリストに掲載することとした。

＜４つの視点＞
①　本道に導入されているか。
②　本道に定着できるか。（越冬の可能性など）
③　本道に定着しているか。
④　本道への影響等が報告されている、あるいは懸念されるか。

また、本道の生態系等への影響が最も懸念される「カテゴリーＡ」に区分された外来種については、対策の必要な種を明確化し、関係機関や団体が連携した対策が推進されるよう影響の程度等により対策の優先度を検討し、次表２「カテゴリー区分Ａの細区分」により、新たに「Ａ１～Ａ３」に細区分した。

なお、細区分にあたっては、影響の評価、外来生物法における指定状況や日本や世界の侵略的外来種ワースト１００の選定状況などに加え、現行の法制度による規制の有無、資源としての利用実態などを総合的に勘案し、選定した。

表１　　カテゴリー区分（対象生物の選定の考え方）

網がけしているカテゴリー区分に該当する種が、ブルーリストの選定種である。
なお、実験・動物園利用などの封じ込め下にある動物、農地・林地・園地や家庭菜園、花壇・宅地の庭などの人の管理下で栽培されている植物については、選定していない。

<table>
<tr><th>視点①</th><th>視点②</th><th>視点③</th><th>視点④</th><th rowspan="3">カテゴリー区分</th></tr>
<tr><td>本道に導入(※１)されているか</td><td>本道に定着できるか（越冬の可能性など）</td><td>本道に定着しているか</td><td>本道への影響(※2)は</td></tr>
<tr><td>○：導入されている
△：不明またははっきりしない
×：導入されていない可能性が高い</td><td>○：定着できる（またはそのおそれがある）
×：定着できない可能性が高い</td><td>○：定着している
△：不明またははっきりしない
×：定着していない可能性が高い</td><td>○：影響等が報告されている
あるいは懸念されている
△：上記以外</td></tr>
<tr><td rowspan="6">○</td><td rowspan="5">○</td><td rowspan="2">○</td><td>○</td><td>A</td></tr>
<tr><td>△</td><td>B</td></tr>
<tr><td rowspan="2">△</td><td>○</td><td>C</td></tr>
<tr><td>△</td><td>D</td></tr>
<tr><td>×</td><td>○</td><td>E</td></tr>
<tr><td></td><td>△</td><td>F</td></tr>
<tr><td></td><td>×</td><td>×</td><td></td><td>G</td></tr>
<tr><td rowspan="6">△・×</td><td rowspan="5">○</td><td rowspan="2">○（※３）</td><td>○</td><td rowspan="6">H うち注意種 h (※4)</td></tr>
<tr><td>△</td></tr>
<tr><td rowspan="2">△</td><td>○</td></tr>
<tr><td>△</td></tr>
<tr><td>×</td><td>○</td></tr>
<tr><td></td><td>△</td><td>I</td></tr>
<tr><td></td><td>×</td><td></td><td></td><td>J</td></tr>
<tr><td colspan="4">（昆虫のみ）
導入されている　「室内昆虫」である(※5)</td><td>K</td></tr>
</table>

（※１）「導入」とは
野生生物本来の移動能力を超えて、人為によって意図的・非意図的に移動した（された）ことを指し、導入の時期については、原則として明治時代以降に本道に導入された生物種を外来種として捉える。

（※２）「影響」の例
①上位捕食者としての影響　②植生などへの影響　③競合、駆逐の可能性
④交雑による遺伝的攪乱　⑤在来生物への病気、寄生虫の媒介
⑥農林水産業などへの影響　⑦人の健康への影響

（※３）
この欄は、在来種である可能性があることにより、視点①を「△」とした場合に適用する。

（※４）「注意種」とは
導入される可能性が高く、導入されると定着し影響が懸念される等、特に注意が必要と考えられるもの

（※５）
貯穀害虫などは、A～Eなどに区分しにくいため、「室内害虫」としカテゴリー区分を「K」とする。

表２　　カテゴリー区分Ａの細区分

北海道ブルーリスト2010に掲載される種のうち最も生態系等への影響が懸念される「カテゴリーＡ」の種について、Ａ１、Ａ２、Ａ３の３段階に細区分した。

なお、Ａ１、Ａ２の種については、引き続き分布情報を収集し、今後のリストの見直しに反映するとともに、特にＡ１の種については、関係機関・団体と連携し、防除（定着または、拡散を防止するため、捕獲（除去）を行い適正に処分する）を行うなど引き続き対策を推進する。

「Ａ１」：緊急に防除対策が必要な外来種
「Ａ２」：本道の生態系等へ大きな影響を及ぼしており、防除対策の必要性について検討する外来種
「Ａ３」：本道に定着しており、生態系等への影響が報告または懸念されている外来種

※植物については、原植生が比較的明確でその学術的価値が高く、保護が優先されるべき地域内（原生自然環境保全地域、国立、国定公園特別保護地区など）においては、Ａ２の植物についてもＡ１とみなす。

（３）リストの分類

リストの分類は、次の参考文献を活用し、整理した。

分類群	参　考　文　献
哺乳類	今泉吉典（1988）世界哺乳類和名辞典. 平凡社
鳥　類	日本鳥類目録編集委員会（2000）日本鳥類目録. 日本鳥学会
爬虫類	標準和名制定委員会（2003）爬虫両棲類学会報Vol.2003.No.1. 日本爬虫両棲類学会
両生類	標準和名制定委員会（2003）爬虫両棲類学会報Vol.2003.No.1. 日本爬虫両棲類学会
魚　類	Nelson,J.S.(1994)Fishes of the World,third edition. John Wiley & Sons,Inc 中坊徹次編（1993）日本産魚類検索. 東海大学出版会
昆　虫	九州大学農学部昆虫学研究室ほか（1989）日本産昆虫総目録. 九州大学昆虫学教室
甲殻類	西村三郎編（1995）原色検索日本海岸動物図鑑［Ⅱ］.保育社
軟体動物	奥谷喬司編（2000）日本近海産貝類図鑑.東海大学 Beesley,P.L.et al(1998) Mollusca: The Southern Synthesis.CSIRO Publ
植　物	清水建美編（2003）日本の帰化植物. 平凡社

３　北海道ブルーリスト2010（選定結果）

（１）概要

北海道ブルーリスト2010においては、哺乳類、鳥類、爬虫類、両生類、魚類（淡水魚、汽水魚、通し回遊魚）、昆虫、昆虫以外の無脊椎動物及び植物を各分類群毎に検討した結果、全部で８６０種の生物が選定された。

分類群毎に見ると、哺乳類が２５種、鳥類が８種、爬虫類が１０種、両生類が１９種、魚類が３６種、昆虫が９０種、昆虫以外の無脊椎動物が３３種、植物が６３９種となった。

原産地を国外・国内別に見ると、国外が７０６種、国内が１２５種、不明が２９種となっており、国外から導入されたものが８割以上を占めている。なお、原産地（鳥類の場合は繁殖地）が国外である場合は「国外外来種」、国内である場合は「国内外来種」、国外と国内にまたがる場合は「国内外来種」、不明の場合は「不明」と区分した。

カテゴリー区分別に見ると、Ａ１が６種、Ａ２が２６種、Ａ３が１９３種、Ｂが４１９種、Ｃが３６種、Ｄが１１２種、Ｅが１８種、ｈが２９種、Ｋが２１種となっている。

なお、外来種の生息実態等については、不明な部分も多いため、新たな知見の収集に努めるなどし、今後とも、適宜、リスト（種の解説の記載内容を含む）の見直しを図ることとする。

＜北海道ブルーリスト2010に選定された生物数一覧＞

分類群	種数	内訳											
		原産地の区分			カテゴリー区分								
		国外	国内	不明	A1	A2	A3	B	C	D	E	h	K
哺乳類	25	18	7	－	2	2	8	1	2	－	6	4	－
鳥類	8	5	3	－	－	－	3	2	3	－	－	－	－
爬虫類	10	3	7	－	－	1	－	－	2	－	2	5	－
両生類	19	2	17	－	－	1	4	－	－	－	3	11	－
魚類	36	24	12	－	2	2	12	7	6	4	3	－	－
昆虫類	90	40	26	24	1	1	46	－	17	1	2	1	21
昆虫以外の無脊椎動物	33	28	4	1	1	2	14	－	6	－	2	8	－
植物	639	586	49	4	－	17	106	409	－	107	－	－	－
合計	860	706	125	29	6	26	193	419	36	112	18	29	21

（２）カテゴリーＡ１～Ａ３のリスト

区分		分類	種名	被害の実態・おそれ	道内分布	外来生物法 ※1	日本 ワースト100 ※2	世界 ワースト100 ※2
A1	1	哺乳類	アライグマ	在来種との競合、駆逐、捕食、農業等被害、人への健康被害	全道各地	特定	○	
	2	哺乳類	ミンク	在来種との競合、駆逐、捕食、農業等被害	全道各地	特定		
	3	魚類	ブラウントラウト	在来種との競合、駆逐、捕食、交雑	全道各地	要注意	○	○
	4	魚類	ブルーギル	在来種との競合、駆逐、捕食	函館	特定	○	
	5	昆虫	セイヨウオオマルハナバチ	在来種との競合、駆逐、交雑、種子の生産阻害、寄生虫媒介	全道各地	特定	○	
	6	無脊類	ウチダザリガニ	在来種との競合、駆逐、捕食、ミズカビ病の媒介	道内各地	特定	○	
A2	1	哺乳類	ニホンイタチ	在来種との競合、駆逐、捕食、農業等被害	全道各地		○	
	2	哺乳類	テン	在来種との競合、駆逐、捕食、農業等被害	道央、道南			
	3	爬虫類	アカミミガメ(ﾐｼｼｯﾋﾟｱｶﾐﾐｶﾞﾒ)	在来種との競合、駆逐、捕食	札幌、帯広など	要注意	○	○
	4	両生類	ウシガエル	在来種との競合、駆逐、捕食	道南	特定	○	○
	5	魚類	ニジマス	在来種との競合、駆逐、交雑	全道各地	要注意	○	○
	6	魚類	カワマス	在来種との競合、駆逐、交雑	空知川水系など	要注意		
	7	昆虫	カブトムシ	在来種との競合、駆逐	全道各地			
	8	無脊椎	チャコウラナメクジ	在来種との競合、駆逐、農業被害、寄生虫媒介	道南、道央		○	
	9	無脊椎	サカマキガイ	在来種との競合、駆逐、農業被害、寄生虫媒介	道南、道央		○	
	10	植物	オオハンゴンソウ	在来植物との競合、駆逐、大群落を形成	道内各地	特定		
	11	植物	オオアワダチソウ	在来植物との競合、駆逐、大群落を形成	道内各地	要注意	○	
	12	植物	アメリカオニアザミ	在来植物との競合、駆逐	道内各地	要注意		
	13	植物	セイヨウタンポポ	在来植物との競合、駆逐	道内各地	要注意	○	
	14	植物	ヘラオオバコ	在来植物との競合、駆逐、花粉症の原因	道内全域（道東少）	要注意		
	15	植物	ブタナ	在来植物との競合、駆逐	道内全域（道東少）	要注意		
	16	植物	コウリンタンポポ	在来植物との競合、駆逐	道内各地			
	17	植物	ムラサキツメクサ	在来植物との競合、駆逐	道内各地			
	18	植物	シロツメクサ	在来植物との競合、駆逐	道内各地			
	19	植物	フランスギク	在来植物との競合、駆逐	道内各地			
	20	植物	ブタクサ	在来植物との競合、駆逐、花粉症の原因	道内各地(南西部多)	要注意	○	
	21	植物	イワミツバ	在来植物との競合、駆逐、大群落を形成	道内各地			
	22	植物	ハリエンジュ	在来植物との競合、駆逐、環境攪乱	道内各地	要注意	○	
	23	植物	キショウブ	在来植物との競合、駆逐	道内各地	要注意	○	
	24	植物	オランダガラシ	在来植物との競合、駆逐	道内各地	要注意		
	25	植物	キバナコウリンタンポポ	在来植物との競合、駆逐	道内各地			
	26	植物	セイタカアワダチソウ	在来植物との競合、駆逐	道央など	要注意	○	
A3	上記以外の193種(コブハクチョウ、アズマヒキガエル、アメリカザリガニなど)							

※１　外来生物法（特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律）の指定等状況
　　特　定－特外来生物の略。特に問題の大きな外来種を国が外来生物法により特定外来生物として指定し、運搬や飼養等を規制するとともに防除を推進することとしている。
　　要注意－要注意外来生物の略。外来生物法による法規制ではないが、国が生態系に悪影響を及ぼしうる外来種を選定し、個人や事業者等に対し、適切な取扱いを呼びかけている。
※２　日本の侵略的外来種ワースト１００（日本生態学会）の選定状況
※３　世界の侵略的外来種ワースト１００（ＩＵＣＮ）の選定状況

（３）各分類群毎のリスト

ア　哺乳類

（ア）国外外来種（１８種）

目　　名	科　　名	種名　（亜種名：*）	カテゴリー区　　分
ウサギ	ウサギ	カイウサギ	Ａ３
ネズミ	リス	シマリス（チョウセンシマリス）	C
		アメリカモモンガ	E
		タイリクモモンガ	E
		オオアメリカモモンガ	E
		プレーリードッグの一種	B
		キタリス	C
		ハイイロリス	h
	ネズミ	ドブネズミ	Ａ３
		クマネズミ	Ａ３
		ハツカネズミ	Ａ３
ネコ	アライグマ	アライグマ	Ａ１
	イタチ	ミンク	Ａ１
		フェレット	E
	ジャコウネコ	ハクビシン	Ａ３
フクロネズミ	クスクス	フクロギツネの一種	E
	フクロモモンガ	フクロモモンガの一種	E
ハリネズミ形	ハリネズミ	ハリネズミ科（ｴﾘﾅｹｳｽ属）の全種	h

（イ）国内外来種（７種）

目　　名	科　　名	種名　（亜種名：*）	カテゴリー区　　分
ネコ	イヌ	イヌ	Ａ３
	イタチ	テン	Ａ２
		ニホンイタチ	Ａ２
	ネコ	ネコ	Ａ３
ウシ	イノシシ	イノシシまたはイノブタ	Ａ３
モグラ	トガリネズミ	ニホンジネズミ	h
コウモリ	ヒナコウモリ	イエコウモリ	h

(*)亜種が問題となっている場合は、カッコ内に亜種名を記載

イ　鳥類

（ア）国外外来種（５種）

目　　名	科　　名	種名　（亜種名：*）	カテゴリー区　　分
カモ	カモ	コブハクチョウ	Ａ３
		コクチョウ	C
キジ	キジ	コジュケイ（コジュケイ）	C
		キジ（コウライキジ）	Ａ３
ハト	ハト	カワラバトまたはドバト	Ａ３

（イ）国内外来種（３種）

目　　名	科　　名	種名　（亜種名：*）	カテゴリー区　　分
キジ	キジ	ヤマドリ（ﾔﾏﾄﾞﾘ、ｳｽｱｶﾔﾏﾄﾞﾘ）	B
カモ	カモ	アイガモ	C
スズメ	カラス	カササギ（カササギ）	B

(*)亜種が問題となっている場合は、カッコ内に亜種名を記載

ウ　爬虫類

（ア）国外外来種（３種）

目　　名	科　　名	種名　（亜種名：*）	カテゴリー区　　分
カメ	ヌマガメ	アカミミガメ（ﾐｼｼｯﾋﾟｱｶﾐﾐｶﾞﾒ）	Ａ２
	カミツキガメ	カミツキガメ	E
	スッポン	トゲスッポン	h

（イ）国内外来種（７種）

目　　名	科　　名	種名　（亜種名：*）	カテゴリー区　　分
カメ	ヌマガメ	クサガメ	C
		ニホンイシガメ	C
	スッポン	ﾁｭｳｺﾞｸｽｯﾎﾟﾝ（ﾁｭｳｺﾞｸｽｯﾎﾟﾝ、ﾆﾎﾝｽｯﾎﾟﾝ）	E
有鱗	カナヘビ	アムールカナヘビ	h
	ナミヘビ	タカチホヘビ	h
		ヒバカリ（ヒバカリ）	h
		ヤマカガシ（ヤマカガシ）	h

(*)亜種が問題となっている場合は、カッコ内に亜種名を記載

エ　両生類

（ア）国外外来種（２種）

目　　名	科　　名	種名　（亜種名：*）	カテゴリー区　　分
無尾	アカガエル	ウシガエル	Ａ２
	ヒキガエル	ヨーロッパミドリヒキガエル	h

（イ）国内外来種（１７種）

目　　名	科　　名	種名　（亜種名：*）	カテゴリー区　　分
有尾	サンショウウオ	トウホクサンショウウオ	h
		クロサンショウウオ	h
		ハクバサンショウウオ	h
		ヒダサンショウウオ	h
		ハコネサンショウウオ	h
	イモリ	アカハライモリ	E
無尾	ヒキガエル	ニホンヒキガエル（ｱｽﾞﾏﾋｷｶﾞｴﾙ）	Ａ３
	アカガエル	トノサマガエル	Ａ３
		ダルマガエル（ﾄｳｷｮｳﾀﾞﾙﾏｶﾞｴﾙ）	Ａ３
		ツチガエル	Ａ３
		ニホンアカガエル	E
		ヤマアカガエル	h
		タゴガエル（タゴガエル）	h
		チョウセンヤマアカガエル	h
	アオガエル	モリアオガエル	E
		カジカガエル	h
		シュレーゲルアオガエル	h

(*)亜種が問題となっている場合は、カッコ内に亜種名を記載

オ　魚類

（ア）国外外来種（２４種）

目　　名	科　　名	種名　（亜種名：*）	カテゴリー区　　分
ガー	ガー	アリゲーター・ガー	C
		ロングノーズ・ガー	E
		スポッテッド・ガー	E
ウナギ	ウナギ	ヨーロッパウナギ	C
コイ	コイ	タイリクバラタナゴ	Ａ３
		ソウギョ	C
		アオウオ	D
		キンギョ	Ａ３
カワカマス	カワカマス	ノーザンパイク	E
サケ	サケ	ブラウントラウト	Ａ１
		ニジマス	Ａ２
		カワマス	Ａ２
		マスノスケ	D
		ギンザケ	C
		シナノユキマス	D
		コレゴヌス・ペレッド	D
カダヤシ	カダヤシ	グッピー	Ａ３
		コクチモーリー	B
スズキ	サンフィッシュ	ブルーギル	Ａ１
		オオクチバス	C
		コクチバス	C
	カワスズメ	カワスズメ	B
		ナイルティラピア	Ａ３
	タイワンドジョウ	カムルチー	Ａ３

（イ）国内外来種（１２種）

目　　名	科　　名	種名　（亜種名：*）	カテゴリー区　　分
コイ	ドジョウ	ドジョウ	B
	コイ	ゲンゴロウブナ	Ａ３
		コイ	Ａ３
		タモロコ	Ａ３
		オイカワ	B
		モツゴ	Ａ３
		シナイモツゴ	B
		アブラハヤ	B
		キンブナ	Ａ３
ナマズ	ナマズ	ナマズ	Ａ３
サケ	サケ	サクラマス（アマゴ）	Ａ３
ダツ	メダカ	メダカ	B

(*)亜種が問題となっている場合は、カッコ内に亜種名を記載

カ　昆虫

（ア）国外外来種（４0種）

目　　名	科　　名	種名　（亜種名：*）	カテゴリー区　　分
りんし 鱗翅	ヒトリガ	アメリカシロヒトリ	Ａ３
	シロチョウ	オオモンシロチョウ	Ａ３
	タテハチョウ	アカボシゴマダラ	C
	セセリチョウ	カラフトセセリ	Ａ３
	メイガ	ニカメイガ	Ａ３
	ハマキガ	ボケヒメシンクイまたはスモモヒメシンクイ	Ａ３
	キバガ	バクガ	Ａ３
	スカシバガ	スグリコスカシバ	C
	ヒロズコガ	イガ	K
そうし 双翅	ショウジョウバエ	オナジショウジョウバエ	Ａ３
	ハモグリバエ	マメハモグリバエ	C
		カーネーションハモグリバエ	C
		アシグロハモグリバエ	Ａ３
	ハナアブ	スイセンハナアブ	Ａ３
	ヒツジバエ	ヒツジバエ	Ａ３
	ヒフバエ	ウシバエ	C
	クロバエ	ホホアカクロバエ	Ａ３
まくし 膜翅	ミツバチ	セイヨウオオマルハナバチ	Ａ１
	タマバチ	クリタマバチ	Ａ３
	ツヤコバチ	ワタムシヤドリコバチ	D
	カタビロコバチ	クローバータネコバチ	C
	ハバチ	オウトウナメクジハバチ	C
しょうし 鞘翅	ゾウムシ	アカウキクサゾウムシ	Ａ３
		イネミズゾウムシ	Ａ３
		オオタコゾウムシ	Ａ３
		キンケクチブトゾウムシ	Ａ３
		ケチビコフキゾウムシ	Ａ３
		サビチビコフキゾウムシ	Ａ３
	ゴミムシ	コルリアトキリゴミムシ	Ａ３
はんし 半翅	アブラムシ	リンゴワタムシ	Ａ３
		ブドウネアブラムシ	C
	カタカイガラムシ	イチイカタカイガラムシ	Ａ３
	コナジラミ	イチゴコナジラミ	C
		オンシツコナジラミ	Ａ３
	マルカイガラムシ	ナシマルカイガラムシ	C
	ワタフキカイガラムシ	イセリアカイガラムシ	h
そうし 総翅	アザミウマ	グラジオラスアザミウマ	C
		チャノキイロアザミウマ	C
		ミカンキイロアザミウマ	C
ちょくし 直翅	コオロギ	ヨーロッパイエコオロギ	C

（イ）国内外来種（２６種）

目　　名	科　　名	種名　（亜種名：*）	カテゴリー区　　分
りんし 鱗翅	ハマキガ	カラマツイトヒキハマキ	Ａ３
		カラマツヒメハマキ	Ａ３
		カラマツチャイロヒメハマキ	Ａ３
		カラマツミキモグリガ	Ａ３
	ツツミノガ	カラマツツツミノガ	Ａ３
	メイガ	カシノシマメイガ	Ａ３
		ノシメマダラメイガ（ノシメコクガ）	Ａ３
そうし 双翅	ハナバエ	カラマツタネバエ	Ａ３
まくし 膜翅	ミツバチ	オオマルハナバチ（オオマルハナバチ）	Ｅ
		コマルハナバチ（コマルハナバチ）	Ｅ
	ヒラタハバチ	カラマツヒラタハバチ	Ａ３
		ニホンカラマツヒラタハバチ	Ａ３
	ハバチ	カラマツキハラハバチ	Ａ３
		カラマツハラアカハバチ	Ａ３
		ミスジヒメカラマツハバチ	Ａ３
しょうし 鞘翅	オサムシ	アオオサムシ	Ａ３
	ゾウムシ	オリーブアナアキゾウムシ	Ａ３
	コガネムシ	カブトムシ	Ａ２
	クワガタムシ	オオクワガタ＊本州産	Ｃ
	ホタル	ヘイケボタル＊本州産	Ｃ
		ゲンジボタル	Ｃ
はんし 半翅	カサアブラムシ	カラマツカサアブラムシ	Ａ３
	アブラムシ	カラマツオオアブラムシ	Ａ３
		カラマツイボオオアブラムシ	Ａ３
		カラマツミキオオアブラムシ	Ａ３
		カラマツチビオオアブラムシ	Ａ３

（ウ）不明（２４種）

目　　名	科　　名	種名　（亜種名：*）	カテゴリー区　　分
りんし 鱗翅	メイガ	スジコナマダラメイガ	Ａ３
		スジマダラメイガ	Ａ３
		コメノシマメイガ	Ａ３
	ハマキガ	ナシヒメシンクイ	Ａ３
しょうし 鞘翅	オサゾウムシ	ココクゾウムシ	Ｋ
	マメゾウムシ	アズキマメゾウムシ	Ｋ
		インゲンマメゾウムシ	Ｋ
		エンドウゾウムシ	Ｋ
	ゴミムシダマシ	コメノゴミムシダマシ	Ｋ
	ケシキスイ	クリイロデオキスイ	Ｋ
	カッコウムシ	アカクビホシカムシ	Ｋ
	ナガシンクイムシ	ケブトヒラタキクイムシ	Ｋ
		チビタケナガシンクイ	Ｋ
		ナラヒラタキクイムシ	Ｋ
		ヒラタキクイムシ	Ｋ
チャタテムシ	コナチャタテ	カツブシチャタテ	Ｋ
もうし 網翅	ゴキブリ	ウルシゴキブリ	Ｋ
		クロゴキブリ	Ｋ
		コワモンゴキブリ	Ｋ
		トビイロゴキブリ	Ｋ
		ワモンゴキブリ	Ｋ
	チャバネゴキブリ	チャバネゴキブリ	Ｋ
		ヨウランゴキブリ	Ｋ
そうび 総尾	シミ	セイヨウシミ	Ｋ

(*)亜種が問題となっている場合は、カッコ内に亜種名を記載

キ　昆虫以外の無脊椎動物（甲殻類、軟体動物など）

（ア）国外外来種（２８種）

目　　名	科　　名	種名　（亜種名：*）	カテゴリー区　　分
むへい 無柄	フジツボ	キタアメリカフジツボ	Ａ３
じゅっきゃく 十脚	ザリガニ	ウチダザリガニ	Ａ１
	アメリカザリガニ	アメリカザリガニ	Ａ３
		ﾐｽﾃﾘｰｸﾚｲﾌｨｯｼｭ（ﾏｰﾌﾞﾙｸﾚｲﾌｨｯｼｭ）	Ｃ
げんしちょうぜつ 原始紐舌	リンゴガイ	スクミリンゴガイ	Ｃ
ばんそく 盤足	ミズツボ	コモチカワツボ	h
	カリバガサガイ	シマメノウフネガイ	Ａ３
きがん 基眼	モノアラガイ	ヒメモノアラガイ	Ａ３
		コシタカヒメモノアラガイ	Ａ３
		ハブタエモノアラガイ	h
	サカマキガイ	サカマキガイ	Ａ２
	ヒラマキガイ	インドヒラマキガイ	Ｅ
しんゆうはい 真有肺	オカチョウジガイ	トクサオカチョウジガイ	Ｃ
		ホソオカチョウジガイ	Ｃ
	コハクガイ	コハクガイ	Ａ３
		ウスグチベッコウ	Ａ３
	コウラナメクジ	コウラナメクジ	Ａ３
		チャコウラナメクジ	Ａ２
	ノハラナメクジ	ノハラナメクジ	Ａ３
	オナジマイマイ	オナジマイマイ	Ｃ
イガイ	イガイ	ムラサキイガイ	Ａ３
		コウロエンカワヒバリガイ	h
		カワヒバリガイ	h
		淡水産イガイの一種	Ｅ
マルスダレガイ	シジミガイ	シジミガイの一種	Ｃ
	マルスダレガイ	ホンビノスガイ	h
	カワホトトギスガイ	イガイダマシ	h
きゅうこう 吸腔	タマガイ	サキグロタマツメタ	h

（イ）国内外来種（４種）

目　　名	科　　名	種名　（亜種名：*）	カテゴリー区　　分
げんしちょうぜつ 原始紐舌	タニシ	ヒメタニシ	Ａ３
しんゆうはい 真有肺	オナジマイマイ	ウスカワマイマイ	Ａ３
じゅっきゃく 十脚	ヌマエビ	ヌマエビ属（ヌマエビ北中部群/ヌマエビ南部群/ヌカエビ）	Ａ３
		カワリヌマエビ属（シナヌマエビ、ミナミヌマエビ）	Ａ３

（ウ）不明（1種）

目　　名	科　　名	種名　（亜種名：*）	カテゴリー区　　分
かいきゃく 皆脚	イソウミグモ	カイヤドリウミグモ	h

(*)亜種が問題となっている場合は、カッコ内に亜種名を記載

ク　植物

（ア）国外外来種（５８６種）

科　　名	種　　名	異　　名	ｶﾃｺﾞﾘｰ区　分
ヤナギ	ウラジロハコヤナギ	ｷﾞﾝﾄﾞﾛ	A3
	カロライナポプラ	ｶﾛﾘﾅﾎﾟﾌﾟﾗ	B
	カイリョウポプラ	ｲﾀﾘｱﾎﾟﾌﾟﾗ、ｴｳﾛｱﾒﾘｶﾎﾟﾌﾟﾗ	B
	セイヨウハコヤナギ	ﾎﾟﾌﾟﾗ、ｸﾛﾎﾟﾌﾟﾗ	B
	シダレヤナギ		B
	コリヤナギ		B
	ウンリュウヤナギ		B
ニレ	ノニレ	ﾏﾝｼｭｳﾆﾚ	B
クワ	アサ	ﾀｲﾏ	A3
タデ	シャクチリソバ	ﾋﾏﾗﾔｿﾊﾞ、ｼｭｯｺﾝｿﾊﾞ	D
	ダッタンソバ	ﾆｶﾞｿﾊﾞ	D
	ソバ		B
	ソバカズラ		B
	オオツルイタドリ		B
	ツルタデ	ﾂﾙｲﾀﾄﾞﾘ	B
	オオケタデ	ｵｵﾍﾞﾆﾀﾃﾞ	B
	ツルドクダミ	ｶｼｭｳ	D
	ハイミチヤナギ	ｺｺﾞﾒﾐﾁﾔﾅｷﾞ	A3
	ヒメスイバ		A3
	ヌマダイオウ		D
	アレチギシギシ		D
	ナガバギシギシ	ﾁﾁﾞﾐｽｲﾊﾞ	A3
	ミゾダイオウ		D
	エゾノギシギシ	ﾋﾛﾊｷﾞｼｷﾞｼ	A3
	ノハラダイオウ		D
ヤマゴボウ	ヤマゴボウ		B
	アメリカヤマゴボウ	ﾖｳｼｭﾔﾏｺﾞﾎﾞｳ、ｲﾝｸﾍﾞﾘｰ	B
オシロイバナ	オシロイバナ	ﾕｳｹﾞｼｮｳ	D
ザクロソウ	クルマバザクロソウ		D
スベリヒユ	マキバヌマハコベ		B
	マツバボタン		B
ナデシコ	ムギセンノウ	ﾑｷﾞﾅﾃﾞｼｺ、ﾑｷﾞﾅｾﾝﾉｳ	D
	セイヨウミミナグサ	ｴﾀﾞｳﾁﾐﾐﾅｸﾞｻ、ｶﾗﾌﾄﾐﾐﾅｸﾞｻ	B
	オランダミミナグサ	ｱｵﾐﾐﾅｸﾞｻ	B
	タイリンミミナグサ	ｾﾗｽﾃｨｳﾑ	D
	ノハラナデシコ		B
	ヒゲナデシコ	ｱﾒﾘｶﾅﾃﾞｼｺ、ﾋﾞｼﾞｮﾅﾃﾞｼｺ	D
	セキチク	ｶﾗﾅﾃﾞｼｺ	D
	ヒメナデシコ（シロバナヒメナデシコを含む）	ｵﾄﾒﾅﾃﾞｼｺ	B
	ヌカイトナデシコ		B
	アメリカセンノウ	ﾔｸﾞﾙﾏｾﾝﾉｳ	B
	フランネルソウ	ｽｲｾﾝﾉｳ	B
	アライトツメクサ	ｱﾗｲﾄﾞﾂﾒｸｻ、ﾄﾖﾊﾗﾂﾒｸｻ	B
	サボンソウ	ｼｬﾎﾞﾝｿｳ	B
	シバツメクサ		B
	マツヨイセンノウ	ﾋﾛﾊﾉﾏﾝﾃﾏ、ｱﾒﾘｶﾋﾞﾗﾝｼﾞ	A3
	ムシトリナデシコ	ｺﾏﾁｿｳ、ﾊｴﾄﾘﾅﾃﾞｼｺ	A3
	コムギセンノウ	ｳﾒﾅﾃﾞｼｺ	D
	オオシラタマソウ		D
	フタマタマンテマ	ﾎｻﾞｷﾏﾝﾃﾏ	B
	アケボノセンノウ		B
	シロバナマンテマ		D
	ツキミセンノウ		B
	サクラマンテマ	ﾌｸﾛﾅﾃﾞｼｺ、ｵｵﾏﾝﾃﾏ	D

科　　名	種　　名	異　　名	ｶﾃｺﾞﾘｰ区　分
ナデシコ	シラタマソウ		B
	ノハラツメクサ		A3
	ウスベニツメクサ		B
	カラフトホソバハコベ	ｶﾗﾌﾄﾎｿﾊﾞﾂﾒｸｻ、ﾎｿﾊﾞﾊｺﾍﾞ	A3
	アワユキハコベ		D
	コハコベ	ﾊｺﾍﾞ	A3
	ドウカンソウ		B
アカザ	ホコガタアカザ	ｱﾚﾁﾊﾏｱｶｻﾞ	B
	Atriplex nitens Schkuhr.（和名なし）		D
	シロザ	ｼﾛｱｶｻﾞ	B
	ケアリタソウ		D
	コアカザ		B
	ウラジロアカザ		B
	ウスバアカザ	ｵｵﾊﾞｱｶｻﾞ、ｵｵｱｶｻﾞ	B
	ミナトアカザ	ﾉｺｷﾞﾘｱｶｻﾞ	D
	ヒロハヒメハマアカザ		B
	ゴウシュウアリタソウ		A3
	イソホウキギ	ｲｿﾎｵｷｷﾞ	B
	ホウキギ	ﾎｳｷｸﾞｻ	B
	ハリヒジキ		D
	ヒメハマアカザ		B
	ノハラヒジキ		D
ヒユ	ヒメシロビユ	ｼﾛﾋﾞｭ	B
	イヌビユ	ﾉﾋﾞｭ	B
	ホソアオゲイトウ		B
	ヒユ		D
	アオゲイトウ	ｱｶｱｵﾋﾞｭ	A3
	アオビユ	ﾎﾅｶﾞｲﾇﾋﾞｭ	B
キンポウゲ	シュウメイギク	ｷﾌﾞﾈｷﾞｸ	D
	セイヨウオダマキ		B
	ヒメタガラシ		B
	セイヨウキンポウゲ	ｱｸﾘｽｷﾝﾎﾟｳｹﾞ	B
	タマキンポウゲ	ｶﾌﾞﾗｷﾝﾎﾟｳｹﾞ	B
	チシマキンポウゲ	ﾏﾙﾊﾞｷﾝﾎﾟｳｹﾞ、ﾓﾘｷﾝﾎﾟｳｹﾞ	B
	ヒロハキンポウゲ		B
	ホソバキンポウゲ		B
スイレン	ハゴロモモ	ﾌｻｼﾞｭﾝｻｲ	A3
オトギリソウ	オオカナダオトギリ		B
	セイヨウオトギリ	ｺｺﾞﾒﾊﾞｵﾄｷﾞﾘ	B
ケシ	ハナビシソウ	ｶﾘﾌｫﾙﾆｱ･ﾎﾟﾋﾟｰ	B
	カラクサケマン		D
	ナガミヒナゲシ		D
	ヒナゲシ	ｸﾞﾋﾞｼﾞﾝｿｳ、ﾉﾊﾗﾋﾅｹﾞｼ	B
	アツミゲシ	ｾﾁｹﾞﾙﾑｹﾞｼ	D
アブラナ	アレチナズナ		D
	シロイヌナズナ		B
	セイヨウワサビ	ﾜｻﾋﾞﾀﾞｲｺﾝ、ｳﾏﾀﾞｲｺﾝ	A3
	ハルザキヤマガラシ	ｾｲﾖｳﾔﾏｶﾞﾗｼ、ﾌﾕｶﾞﾗｼ	A3
	ウスユキナズナ		B
	カラシナ	ｾｲﾖｳｶﾗｼﾅ	B
	セイヨウアブラナ	ﾁｮｳｾﾝﾅﾀﾈ	B
	クロガラシ		B
	オニハマダイコン		A3
	アマナズナ	ﾀﾏﾅｽﾞﾅ、ﾏﾙﾐﾉｱﾏﾅｽﾞﾅ	B
	ヒメアマナズナ	ﾋﾒﾀﾏﾅｽﾞﾅ	B
	ナガミノアマナズナ		B
	ホソミナズナ	ｵｵﾅｽﾞﾅ	B

科　　名	種　　名	異　　名	ｶﾃｺﾞﾘｰ区　分
アブラナ	ミチタネツケバナ		B
	コタネツケバナ	ﾋﾒﾀﾈﾂｹﾊﾞﾅ	D
	ニオイアラセイトウ	ｳｫｰﾙﾌﾗﾜｰ	B
	ツノミナズナ		B
	ナタネハタザオ	ﾏﾙﾊﾞｶﾞﾗｼ、ｺﾊﾞﾝｶﾞﾗｼ	B
	クジラグサ		B
	ロボウガラシ	ｶﾗｸｻﾊﾀｻﾞｵ	B
	イヌナズナ		B
	ヒメナズナ		B
	オハツキガラシ	ﾎｿｶﾞﾗｼ	B
	エゾスズシロ	ｷﾀﾐﾊﾀｻﾞｵ	B
	エゾスズシロモドキ		D
	ハナスズシロ	ﾊﾅﾀﾞｲｺﾝ、ｾｲﾖｳﾊﾅﾀﾞｲｺﾝ	B
	キレハマメグンバイナズナ	ﾐﾅﾐｸﾞﾝﾊﾞｲﾅｽﾞﾅ	B
	ウロコナズナ		B
	コマメグンバイナズナ	ﾋﾒｸﾞﾝﾊﾞｲﾅｽﾞﾅ	B
	カラクサナズナ	ｶﾗｸｻﾆｶﾞﾅ、 ｶﾗｸｻｶﾞﾗｼ、 ｲﾝﾁﾝﾅｽﾞﾅ	A3
	コシミノナズナ		B
	コショウソウ		B
	マメグンバイナズナ	ｺｳﾍﾞﾅｽﾞﾅ、 ｾｲﾖｳｸﾞﾝﾊﾞｲﾅｽﾞﾅ	B
	ニワナズナ	ｱﾘｯｻﾑ	B
	ゴウダソウ	ﾙﾅﾘｱ、ｷﾞﾝｾﾝｿｳ、ｺﾊﾞﾝｿｳ	B
	オランダガラシ	ｸﾚｿﾝ、ﾐｽﾞｶﾞﾗｼ、ﾐｽﾞﾀｶﾞﾗｼ	A2
	タマガラシ	ﾀｶﾞﾗｼ、ﾛｽｹﾅﾀﾈ、ﾛｽｹﾅｽﾞﾅ	B
	ハナダイコン	ｼｮｶﾂｻｲ、ｼｷﾝｿｳ、ｵｵｱﾗｾｲﾄｳ、 ｼｷﾝｻｲ	B
	セイヨウノダイコン	ｷﾊﾞﾅﾀﾞｲｺﾝ	B
	ミヤガラシ		D
	ミミイヌガラシ		D
	キレハイヌガラシ	ﾔﾁｲﾇｶﾞﾗｼ	A3
	シロガラシ	ｷｸｶﾞﾗｼ、ｷｶﾗｼ、ｷｸﾊﾞｶﾞﾗｼ、ｱﾒﾘｶｶﾗｼﾅ	B
	ノハラガラシ	ｵﾆｲﾇｶﾞﾗｼ	B
	ハタザオガラシ		B
	カキネガラシ	ｵﾆﾅｽﾞﾅ、ｹｶｷﾈｶﾞﾗｼ	B
	イヌカキネガラシ		D
	グンバイナズナ	ｸﾞﾝﾊﾞｲｳﾁﾜ	B
	ニンニクガラシ	ｶﾞｰﾘｯｸﾏｽﾀｰﾄﾞ	A3
ベンケイソウ	ヨーロッパタイトゴメ	ｵｳｼｭｳﾏﾝﾈﾝｸﾞｻ	B
	ウスユキマンネングサ	ｼﾛｶﾞﾈﾂﾂﾞｷ、ｲｿｺﾏﾂ	B
	ツルマンネングサ		B
ユキノシタ	フサスグリ	ｱｶｽｸﾞﾘ、ｶｰﾗﾝﾂ、ｱｶﾌｻｽｸﾞﾘ	B
	マルスグリ	ｾｲﾖｳｽｸﾞﾘ、ｵｵｽｸﾞﾘ、ｸﾞｰｽﾍﾞﾘｰ	B
バラ	オランダイチゴ	ｾｲﾖｳｲﾁｺﾞ、ｽﾄﾛﾍﾞﾘｰ	B
	エゾヘビイチゴ	ｴｿﾞﾉﾍﾋﾞｲﾁｺﾞ	B
	ハイキジムシロ		B
	エゾノミツモトソウ		A3
	オオヘビイチゴ	ﾀﾁﾛｳｹﾞ、ｵｵﾛｳｹﾞ	B
	オキジムシロ		D
	スモモ		B
	ルフォリフォリアバラ		B
	セイヨウヤブイチゴ	ﾌﾞﾗｯｸﾍﾞﾘｰ	A3
	イシカリキイチゴ		A3
	ユキヤナギ		B
	クロミキイチゴ	ﾌﾞﾗｯｸﾗｽﾞﾍﾞﾘｰ	A3

科　　名	種　　名	異　　名	ｶﾃｺﾞﾘｰ区　分
マメ	イタチハギ	ｸﾛﾊﾞﾅｴﾝｼﾞｭ、ﾛｼﾔﾊｷﾞ	A3
	クマノアシツメクサ	ﾜﾀｹﾞﾂﾒｸｻ	B
	アメリカホド	ｱﾒﾘｶﾎﾄﾞｲﾓ	B
	ゲンゲ	ﾚﾝｹﾞｿｳ、ﾚﾝｹﾞ	D
	ムレスズメ		D
	エニシダ		A3
	アレチヌスビトハギ		D
	ガレガ		D
	ヒロハレンリソウ	ﾋﾛﾊﾞﾉﾚﾝﾘｿｳ、宿根ｽｲｰﾄﾋﾟｰ	B
	トガリバツメクサ		D
	キバナノレンリソウ	ｾｲﾖｳﾚﾝﾘｿｳ	D
	ヤナギバレンリソウ	ﾎｿﾊﾞﾉﾚﾝﾘｿｳ	B
	シベリアメドハギ		B
	セイヨウミヤコグサ		A3
	ワタリミヤコグサ		B
	ネビキミヤコグサ		B
	キバナハウチワマメ	ﾉﾎﾞﾘﾌｼﾞ	D
	ルピナス	ﾀﾖｳﾊｳﾁﾜﾏﾒ、ﾉﾎﾞﾘﾌｼﾞ、ｼｭｯｺﾝﾙﾋﾟﾅｽ	A3
	コメツブウマゴヤシ		A3
	コウマゴヤシ		D
	ウマゴヤシ	ﾏｺﾞﾔｼ、ﾑﾏｺﾞﾔｼ	D
	ムラサキウマゴヤシ	ｾｲﾖｳｳﾏｺﾞﾔｼ、 ｱﾙﾌｧﾙﾌｧ、 ﾙｰｻﾝ	A3
	コシナガワハギ		D
	シロバナシナガワハギ	ｺｺﾞﾒﾊｷﾞ	A3
	シナガワハギ	ｴﾋﾞﾗﾊｷﾞ	A3
	ハリエンジュ	ﾆｾｱｶｼｱ、ｱｶｼｱ、 ｲﾇｱｶｼｱ	A2
	タマザキクサフジ	ﾀﾏｻﾞｷﾌｼﾞ、ｸﾗｳﾝ･ﾍﾞｯﾁ	B
	シャグマハギ	ｼｬｸﾞﾏﾂﾒｸｻ	A3
	テマリツメクサ		B
	クスダマツメクサ	ﾎｯﾌﾟｸﾛｰﾊﾞｰ、ﾎｯﾌﾟﾂﾒｸｻ、 ｶﾗﾊﾅﾂﾒｸｻ	B
	コメツブツメクサ	ｷﾊﾞﾅﾂﾒｸｻ	B
	タチオランダゲンゲ	ﾀﾁﾂﾒｸｻ、ｱﾙｻｲｸｸﾛｰﾊﾞｰ	A3
	ベニバナツメクサ	ﾍﾞﾆﾊﾞﾅｳﾏｺﾞﾔｼ、 ｸﾘﾑｿﾝｸﾛｰﾊﾞｰ	B
	オオバナノアカツメクサ	ｼﾞｸﾞｻﾞｸﾞｸﾛｰﾊﾞｰ	B
	ムラサキツメクサ	ｱｶﾂﾒｸｻ	A2
	シロツメクサ	ｵﾗﾝﾀﾞｳﾏｺﾞﾔｼ、ｵﾗﾝﾀﾞｹﾞﾝｹﾞ、ﾎﾜｲﾄｸﾛｰﾊﾞｰ	A2
	ミツバツメクサ		D
	イブキノエンドウ	ｶﾗｽﾉｴﾝﾄﾞｳ	B
	ビロードクサフジ（ナヨクサフジを含む）	ｼﾗｹﾞｸｻﾌｼﾞ、ﾍｱﾘｰﾍﾞｯﾁ	B
	ツメクサダマシ	ﾓﾓｲﾛﾂﾒｸｻ、 ｽﾄﾛﾍﾞﾘｰｸﾛｰﾊﾞｰ	B
カタバミ	ムラサキカタバミ	ｷｷｮｳｶﾀﾊﾞﾐ	A3
	オッタチカタバミ		B
フウロソウ	ジャコウオランダフウロ	ｼﾞｬｺｳﾌｳﾛ	B
	アメリカフウロ		B
	オランダフウロ		B
	ヤワゲフウロ		B
	チゴフウロ		B
	ピレネーフウロ		B
	ヒメフウロ	ｼｵﾔｷﾌｳﾛ	B
アマ	アマ	ﾇﾒｺﾞﾏ	B
トウダイグサ	コニシキソウ		B
	マツバトウダイ	ｲﾄｽｷﾞﾄｳﾀﾞｲ	B
ニガキ	ニワウルシ	ｼﾝｼﾞｭ	A3
ヒメハギ	ヒロハセネガ		D
カエデ	ネグンドカエデ	ﾄﾈﾘｺﾊﾞﾉｶｴﾃﾞ	B
ムクロジ	フウセンカズラ		B

科　　名	種　　名	異　　名	ｶﾃｺﾞﾘｰ区　分
ツリフネソウ	ハナツリフネソウ		B
	オニツリフネソウ	ﾀﾞｷﾊﾞﾂﾘﾌﾈｿｳ､ﾛｲﾙﾂﾘﾌﾈｿｳ	A3
ブドウ	アメリカヅタ		B
アオイ	イチビ	ｷﾘｱｻ	A3
	タチアオイ		B
	ギンセンカ	ﾁｭｳﾛｿｳ	B
	ジャコウアオイ	ﾌｳﾛｱｵｲ	A3
	ゼニバアオイ		B
	ナガエアオイ	ﾊｲｱｵｲ	D
	ゼニアオイ		B
	オカノリ		D
	アメリカキンゴジカ		B
スミレ	ニオイスミレ		B
	ミツデスミレ	ｷｸﾊﾞｽﾐﾚ、ｸﾜｶﾞﾀｽﾐﾚ	B
	アメリカスミレサイシン		B
	ノハラサンシキスミレ	ｻﾝｼｷｽﾐﾚ	B
	フイリゲンジスミレ		B
	マキバスミレ		B
	ビオラ・フレックルス		B
	スノープリンセス		B
ウリ	アレチウリ		A3
	オオスズメウリ	ｷﾊﾞﾅｽｽﾞﾒｳﾘ	B
アカバナ	メマツヨイグサ		A3
	オニマツヨイグサ		B
	ヒルザキツキミソウ		B
	オオマツヨイグサ		A3
	コマツヨイグサ		D
	ヒナマツヨイグサ		B
	マツヨイグサ		D
	ツキミタンポポ		B
	アレチマツヨイグサ	ﾋﾒﾏﾂﾖｲｸﾞｻ	B
アリノトウグサ	オオフサモ	ﾇﾏﾌｻﾓ	A3
セリ	イワミツバ（フイリイワミツバを含む）		A2
	イヌニンジン	ﾌｰﾙｽﾞﾊﾟｾﾘ	A3
	ドクニンジン	ﾍﾑﾛｯｸ	A3
	コエンドロ	ｺﾘｱﾝﾀﾞｰ	B
	ノラニンジン		A3
	ウイキョウ	ﾌｪﾝﾈﾙ	B
	パセリ	ｵﾗﾝﾀﾞｾﾞﾘ	B
サクラソウ	アカバナルリハコベ	ﾍﾞﾆﾊﾞﾅﾙﾘﾊｺﾍﾞ	B
	サカコザクラ		B
	コバンコナスビ	ﾖｳｼｭｺﾅｽﾋﾞ	B
	セイヨウユキワリソウ		D
	オオバナサカコザクラ		D
モクセイ	レンギョウ		B
キョウチクトウ	ツルニチニチソウ	ﾋﾞﾝｶ・ﾏﾖｰﾙ	B
	ヒメツルニチニチソウ	ﾋﾞﾝｶ・ﾐﾉｰﾙ	B
アカネ	トゲナシムグラ	ｶｽﾐﾑｸﾞﾗ	A3
	トゲナシヤエムグラ		B
	ヒナソウ	ﾄｷﾜﾅｽﾞﾅ	D
	ハナヤエムグラ	ｱｶﾊﾞﾅﾑｸﾞﾗ	B
ハナシノブ	ホソバヤナギハナシノブ	ﾎｿﾊﾞｺﾙﾛﾐｱ	B
	クサキョウチクトウ	ｵｲﾗﾝｿｳ	B
	シバザクラ	ﾊﾅﾂﾒｸｻ、ﾓｽ･ﾌﾛｯｸｽ	B

科　　名	種　　名	異　　名	ｶﾃｺﾞﾘｰ区　分
ヒルガオ	コヒルガオ		B
	セイヨウヒルガオ	ﾋﾒﾋﾙｶﾞｵ	A3
	アマダオシ		D
	ツメクサダオシ		D
	アメリカネナシカズラ	ｺﾊﾞﾉｱﾒﾘｶﾈﾅｼｶｽﾞﾗ	A3
	アメリカアサガオ		B
	マメアサガオ	ﾋﾒｱｻｶﾞｵ､ﾋﾗﾐﾎｼｱｻｶﾞｵ	B
ムラサキ	アラゲムラサキ	ｷﾊﾞﾅﾑﾗｻｷ	B
	ワルタビラコ		B
	トゲムラサキ		D
	シベナガムラサキ		B
	ノムラサキ		B
	イヌムラサキ		D
	ワスレナグサ	ﾜｽﾙﾅｸﾞｻ､ｼﾝﾜｽﾚﾅｸﾞｻ	A3
	ノハラムラサキ	ﾉﾊﾗﾜｽﾚﾅｸﾞｻ	A3
	ハマワスレナグサ		B
	ヒナムラサキ		B
	オオハリソウ	ﾗﾌｺﾝﾌﾘｰ	B
	ヒレハリソウ	ｺﾝﾌﾘｰ	A3
	シャゼンムラサキ		B
クマツヅラ	ヤナギハナガサ	ﾀﾁﾊﾞｰﾍﾞﾅ､ｻﾝｼﾞｬｸﾊﾞｰﾍﾞﾅ	B
	アレチハナガサ		D
	クマツヅラ	ﾊﾞｰﾍﾞｲﾝ	B
シソ	セイヨウキランソウ	ﾂﾙｼﾞｭｳﾆﾋﾄｴ、 ｾｲﾖｳｼﾞｭｳﾆﾋﾄｴ	B
	チシマオドリコソウ	ｲﾀﾁｼﾞｿ	A3
	コバノカキドオシ	ｾｲﾖｳｶｷﾄﾞｵｼ	B
	ホトケノザ		B
	モミジバヒメオドリコソウ		B
	ヒメオドリコソウ		A3
	モミジバキセワタ		B
	セイヨウハッカ	ﾚﾓﾝﾊﾞｰﾑ	B
	ヨウシュハッカ	ｶﾅﾀﾞﾊｯｶ	B
	アメリカハッカ		B
	ナガバハッカ	ｹﾊｯｶ	B
	コショウハッカ	ﾍﾟﾊﾟｰﾐﾝﾄ、 ｾｲﾖｳﾊｯｶ	B
	オランダハッカ	ｽﾍﾟｱﾐﾝﾄ､ﾐﾄﾞﾘﾊｯｶ	B
	イヌハッカ	ｷｬﾆﾄｯﾌﾟ、 ﾁｸﾏﾊｯｶ	B
	シソ	ｱｶｼﾞｿ	B
	ハナトラノオ	ｶｸﾄﾗﾉｵ	B
	セイヨウウツボグサ		B
	イヌヒメコヅチ		D
	チョロギ		D
	オトメイヌゴマ		D
	フイリオドリコソウ		B
	メグサハッカ	ﾍﾟﾆｰﾛｲﾔﾙ・ﾐﾝﾄ	B
	マルバハッカ	ｱｯﾌﾟﾙ･ﾐﾝﾄ	B
	タイマツバナ	ﾓﾅﾙﾀﾞ、 ﾔｸﾞﾙﾏﾊｯｶ	B
	ハナハッカ	ｵﾚｶﾞﾉ、 ﾜｲﾙﾄﾞ・ﾏｼﾞｮﾗﾑ	B

科　　名	種　　名	異　　名	ｶﾃｺﾞﾘｰ区　分
ナス	チョウセンアサガオ	ﾏﾝﾀﾞﾗｹﾞ	A3
	ヨウシュチョウセンアサガオ		A3
	クコ		B
	オオセンナリ		B
	ツクバネアサガオ	ﾍﾟﾁｭﾆｱ	B
	ホオズキ		B
	ビロードホオズキ	ｱﾒﾘｶﾎｵｽﾞｷ	B
	ワルナスビ（シロバナワルナスビを含む）	ｵﾆﾅｽﾋﾞ	A3
	イヌホオズキ		A3
	トマトダマシ		D
	ケイヌホオズキ		B
	ハリナスビ		D
	ハゴロモイヌホオズキ		D
	アメリカイヌホオズキ		B
	シロバナチョウセンアサガオ		A3
	ヒメケイヌホオズキ		B
フジウツギ	チチブフジウツギ	ﾌｻﾌｼﾞｳﾂｷﾞ	D
ゴマノハグサ	キンギョソウ		B
	ウキアゼナ		D
	ツタバウンラン	ﾂﾀｶﾗｸｻ	B
	キツネノテブクロ	ｼﾞｷﾀﾘｽ	A3
	ムラサキウンラン	ﾋﾒｷﾝｷﾞｮｿｳ	B
	マツバウンラン		B
	キバナウンラン		B
	ヤナギウンラン		D
	ホソバウンラン	ﾎｻﾞｷｳﾝﾗﾝ､ｾｲﾖｳｳﾝﾗﾝ	A3
	アメリカアゼナ		B
	タケトアゼナ		B
	ニシキミゾホオズキ		B
	アレチキンギョソウ		B
	フクロウンラン	ｳﾝﾗﾝﾓﾄﾞｷ	D
	ホザキシオガマ		B
	ウスムラサキツリガネヤナギ	ﾋﾒﾂﾘｶﾞﾈﾔﾅｷﾞ	D
	モウズイカ	ﾆﾜﾀﾊﾞｺ	B
	ムラサキモウズイカ		D
	ビロードモウズイカ	ｱｲﾇﾀﾊﾞｺ､ﾆﾜﾀﾊﾞｺ	A3
	タチイヌノフグリ		B
	カラフトヒヨクソウ		B
	フラサバソウ	ﾂﾀﾊﾞｲﾇﾉﾌｸﾞﾘ	B
	アレチイヌノフグリ		B
	オオイヌノフグリ		B
	コテングクワガタ		B
ノウゼンカズラ	キリ		B
	キササゲ		B
オオバコ	ヘラオオバコ		A2
	セイヨウオオバコ	ｵﾆｵｵﾊﾞｺ	B
	ツボミオオバコ	ﾀﾁｵｵﾊﾞｺ	B
キキョウ	リンドウザキカンパヌラ		B
	ハタザオキキョウ	ｶﾝﾊﾟﾇﾗ	B
	ロベリアソウ	ｾｲﾖｳﾐｿﾞｶｸｼ	B
キク	オオバナノノコギリソウ	ｶﾗﾉｺｷﾞﾘｿｳ	B
	キバナノコギリソウ	ｱﾙﾃﾐｽ	D
	セイヨウノコギリソウ	ﾔﾛｰ	A3
	マルバフジバカマ		B
	ブタクサ		A2
	ブタクサモドキ		B

科　　名	種　　名	異　　名	ｶﾃｺﾞﾘｰ区　分
キク	オオブタクサ	ｸﾜﾓﾄﾞｷ	A3
	エゾノチチコグサ		B
	キゾメカミツレ	ｱﾚﾁｶﾐﾂﾚ	D
	カミツレモドキ	ｼﾛｶﾐﾂﾚ	A3
	ゴボウ	ﾉﾗｺﾞﾎﾞｳ	A3
	ニガヨモギ		D
	クソニンジン	ﾎｿﾊﾞﾆﾝｼﾞﾝ	B
	カワラニンジン	ﾉﾆﾝｼﾞﾝ	B
	ネバリノギク	ｱﾒﾘｶｼｵﾝ	A3
	ユウゼンギク	ｼﾉﾉﾒｷﾞｸ､ﾒﾘｹﾝｺﾝｷﾞｸ	A3
	キダチコンギク		B
	ホウキギク	ｱﾚﾁｼｵﾝ､ﾎｳｷｼｵﾝ､ﾊﾊｷｷﾞｸ、 ﾊﾊｷｼｵﾝ	B
	ヒナギク	ﾃﾞｰｼﾞｰ	B
	アメリカセンダングサ	ｾｲﾀｶﾀｳｺｷﾞ	A3
	ヤグルマギク	ﾔｸﾞﾙﾏｿｳ	B
	ヤグルマアザミ		B
	クロアザミ		B
	イガヤグルマギク		D
	シロバナムシヨケギク	ﾀﾞﾙﾏｼﾞｮﾁｭｳｷﾞｸ､ｼﾛﾑｼﾖｹｸﾞｻ	D
	アカバナムシヨケギク	ｱｶﾑｼﾖｹｷﾞｸ	B
	キクニガナ	ﾁｺﾘｰ	B
	セイヨウトゲアザミ		A3
	アメリカオニアザミ	ｾｲﾖｳｵﾆｱｻﾞﾐ、 ﾋﾚｵﾆｱｻﾞﾐ、 ｱﾒﾘｶﾋﾚｱｻﾞﾐ	A2
	ヒメムカシヨモギ	ｺﾞｲｯｼﾝｸﾞｻ､ﾃﾂﾄﾞｳｸﾞｻ、 ﾒｲｼﾞｿｳ	A3
	アレチノギク	ﾉｼﾞｵｳｷﾞｸ	B
	オオアレチノギク		A3
	オオキンケイギク		A3
	ハルシャギク	ｼﾞｬﾉﾒｷﾞｸ､ｼﾞｬﾉﾒｿｳ､ｸｼﾞｬｸｿｳ	B
	コスモス	ｵｵﾊﾙｼｬｷﾞｸ､ｱｷｻﾞｸﾗ	B
	アレチニガナ		B
	ヤネタビラコ		A3
	エキノプス	ﾙﾘﾀﾏｱｻﾞﾐ	B
	ダンドボロギク	ｵｵﾎﾞﾛｷﾞｸ	B
	ヒメジョオン	ﾔﾅｷﾞﾊﾞﾋﾒｷﾞｸ	A3
	ハルジオン	ﾊﾙｼﾞｮｵﾝ、 ｶﾝｻﾞｼﾊﾞﾅ	A3
	ヤナギバヒメジョオン		B
	ヘラバヒメジョオン		B
	テンニンギク		B
	コゴメギク		B
	ハキダメギク		B
	タチチチコグサ	ﾎｿﾊﾞﾁﾁｺｸﾞｻﾓﾄﾞｷ	D
	エダウチチチコグサ		B
	ヒメチチコグサ	ｴｿﾞﾉﾊﾊｺｸﾞｻ	B
	チョウセンシオン	ﾁｮｳｾﾝﾖﾒﾅ	B
	イヌキクイモ	ﾁｮﾛｷﾞｲﾓ	B
	キクイモ	ﾌﾞﾀｲﾓ	A3
	キクイモモドキ	ﾋﾒｷｸｲﾓ	B
	ヒマワリ	ﾋｸﾞﾙﾏ	B
	ブタナ		A2
	トゲヂシャ	ｱﾚﾁｼﾞｼｬ､ﾄｹﾞｼﾞｼｬ	B
	ナタネタビラコ	ｶﾗﾌﾄﾔﾌﾞﾀﾋﾞﾗｺ	B
	Leontodon autumnalis L(和名なし)		D
	フランスギク		A2
	コシカギク	ｵﾛｼｬｷﾞｸ	B
	カミツレ	ｶﾓﾐｰﾙ、 ｶﾐﾙﾚ	B

科　　名	種　　名	異　　名	ｶﾃｺﾞﾘｰ区　分
キク	コウリンタンポポ		A2
	キバナコウリンタンポポ	ﾉﾊﾗﾀﾝﾎﾟﾎﾟ、ｷﾊﾞﾅﾉｺｳﾘﾝﾀﾝﾎﾟﾎﾟ	A2
	キヌガサギク	ｱﾗｹﾞﾊﾝｺﾞﾝｿｳ	B
	オオハンゴンソウ		A2
	ミツバオオハンゴンソウ	ｵｵﾐﾂﾊﾞﾊﾝｺﾞﾝｿｳ	B
	ツキヌキオグルマ		B
	ノボロギク		A3
	セイタカアワダチソウ	ﾍｲｻﾞﾝｿｳ	A2
	カナダアキノキリンソウ		B
	オオアワダチソウ		A2
	イトバアワダチソウ		B
	アレチノゲシ		B
	オニノゲシ		B
	ナツシロギク	ｺｼﾛｷﾞｸ､ﾅﾂﾉｺｼﾛｷﾞｸ	B
	ヨモギギク	ﾀﾝｼﾞｰ	B
	アカミタンポポ	ｷﾚﾊｱｶﾐﾀﾝﾎﾟﾎﾟ	A3
	セイヨウタンポポ		A2
	バラモンギク	ｷﾊﾞﾅﾑｷﾞﾅﾃﾞｼｺ、ｷﾊﾞﾅｻﾞｷﾓﾝｼﾞﾝ	B
	イヌカミツレ	ｳｲｷｮｳｷﾞｸ､ｲﾇｶﾐﾙﾚ	A3
	フキタンポポ	ｶﾝﾄｳ	B
	ハチミツソウ	ｷﾝﾐﾂｿｳ､ﾊﾈﾐｷﾞｸ	B
	イガオナモミ		B
	オオオナモミ		A3
	トゲオナモミ		D
	コウヤカミツレ		B
	ハマヨモギ		B
	ヒレアザミ	ﾔﾊｽﾞｱｻﾞﾐ	B
	セイヨウニガナ	ﾅｲﾄｳﾆｶﾞﾅ	B
	ルリタマアザミ		B
	アメリカタカサブロウ		B
	ホソバヒマワリ		B
	ヒエラキウム・ピロセラ		B
	トキワアワダチソウ	ｱﾂﾊﾞｱﾜﾀﾞﾁｿｳ、ｵﾆｱﾜﾀﾞﾁｿｳ	B
トチカガミ	コカナダモ		A3
ユリ	ラッキョウ	ｵｵﾆﾗ	D
	キバナギョウジャニンニク		D
	ニンニク		B
	オランダキジカクシ	ｱｽﾊﾟﾗｶﾞｽ､ﾏﾂﾊﾞｳﾄﾞ	B
	ユキゲユリ		B
	ドイツスズラン	ｾｲﾖｳｽｽﾞﾗﾝ	B
	バイモ	ｱﾐｶﾞｻﾕﾘ	B
	ヤブカンゾウ	ｵﾆｶﾝｿﾞｳ	B
	オニユリ	ﾃﾝｶﾞｲﾕﾘ	B
	ルリムスカリ		D
	オオアマナ	ｵｵﾂﾙﾎﾞ、ｵｵﾆｿｶﾞﾗﾑ	B
	シラー	ﾌﾀﾊﾞﾂﾙﾎﾞ	B
	コルチカム	ｲﾇｻﾌﾗﾝ	B
	ヒヤシンス		B
	ムスカリ		B
	チューリップ		B
ヒガンバナ	スノードロップ	ﾏﾂﾕｷｿｳ､ﾕｷﾉﾊﾅ	B
	スノーフレイク	ﾊﾙﾉﾏﾂﾕｷｿｳ､ｽｽﾞﾗﾝｽﾞｲｾﾝ、 ｵｵﾅﾂﾕｷｿｳ、ｵｵﾏﾂﾕｷｿｳ、ﾅﾂﾉﾕｷﾉﾊﾅ	B
	ヒガンバナ	ﾏﾝｼﾞｭｼｬｹﾞ	D
	クチベニズイセン		B
	スイセン（ヤエザキズイセン含む）		B
	タマスダレ		B

科　　名	種　　名	異　　名	ｶﾃｺﾞﾘｰ区　分
ヤマノイモ	ナガイモ		B
アヤメ	クロッカス	ﾑﾗｻｷｻﾌﾗﾝ、ﾊﾅｻﾌﾗﾝ	B
	ハナショウブ		D
	ドイツアヤメ	ｼﾞｬｰﾏﾝｱｲﾘｽ	B
	キショウブ		A2
	ニワゼキショウ		D
	ヒトフサニワゼキショウ		B
	ヒメヒオウギズイセン	ﾓﾝﾄﾌﾞﾚﾁｱ	B
ツユクサ	ムラサキツユクサ		B
	オオムラサキツユクサ		D
イネ	ヤギムギ		B
	ニセコムギダマシ		B
	ヒメヌカボ	ﾍﾞﾙﾍﾞｯﾄﾍﾞﾝﾄ	B
	イトコヌカグサ	ﾊｲﾗﾝﾄﾞﾍﾞﾝﾄ、ｺﾓﾝﾍﾞﾝﾄ	D
	コヌカグサ	ﾚｯﾄﾞﾄｯﾌﾟ	A3
	クロコヌカグサ	ﾌﾞﾗｯｸﾍﾞﾝﾄ	B
	ハイコヌカグサ	ｸﾘｰﾋﾟﾝｸﾞﾍﾞﾝﾄ	B
	ヌカススキ		D
	オオスズメノテッポウ	ﾒﾄﾞｳﾌｫｯｸｽﾃｰﾙ、ﾖｳｼｭｾﾄｶﾞﾔ	B
	ヒメハルガヤ		D
	ハルガヤ	ｽｲｰﾄﾊﾞｰﾅﾙｸﾞﾗｽ	A3
	ホソセイヨウヌカボ		B
	セイヨウヌカボ		B
	オオカニツリ	ﾄｰﾙｵｰﾄｸﾞﾗｽ	B
	カラスムギ	ﾁｬﾋｷ	B
	ハダカエンバク		B
	マカラスムギ	ｵｰﾄ、ｵｰﾄﾑｷﾞ、ｴﾝﾊﾞｸ	B
	オニカラスムギ		B
	コバンソウ	ﾀﾜﾗﾑｷﾞ	D
	ヤクナガイヌムギ		B
	イヌムギ	ﾌﾟﾚｰﾘｰｸﾞﾗｽ	B
	ムクゲチャヒキ		D
	コスズメノチャヒキ	ｲﾇﾑｷﾞﾓﾄﾞｷ、ｽﾑｰｽﾞﾌﾞﾛｰﾑｸﾞﾗｽ	A3
	ハトノチャヒキ	ｶﾓﾒﾉﾁｬﾋｷ	D
	ハマチャヒキ		B
	ヒバリノチャヒキ	ｲｼｶﾘﾁｬﾋｷ	D
	ヒゲナガスズメノチャヒキ	ｵｵｽｽﾞﾒﾉﾁｬﾋｷ、ｵｵｷﾂﾈｶﾞﾔ	D
	カラスノチャヒキ		B
	ノゲイヌムギ	ﾉｹﾞﾉﾑｷﾞ	B
	アレチノチャヒキ	ﾆｾｷﾂﾈｶﾞﾔ	D
	ウマノチャヒキ	ﾋｹﾞﾅｶﾞﾁｬﾋｷ、ﾔｾﾁｬﾋｷ	B
	ヒメクリノイガ		D
	クシガヤ		D
	ヒゲガヤ		B
	カモガヤ	ｵｰﾁｬｰﾄﾞｸﾞﾗｽ	A3
	ハキダメガヤ		D
	シバムギ	ﾋﾒｶﾓｼﾞｸﾞｻ、ｸｵｯｸｸﾞﾗｽ	A3
	シナダレスズメガヤ	ｾｲﾀｶｶｾﾞｸｻ、ｳｨｰﾋﾟﾝｸﾞｸﾞﾗｽ	A3
	コスズメガヤ		B
	オニウシノケグサ	ﾄｰﾙﾌｪｽｸ	A3
	オウシュウトボシガラ		B
	ハガワリトボシガラ		B
	ヒロハノウシノケグサ	ﾒﾄﾞｳﾌｪｽｸ	A3
	オオウシノケグサ	ｸﾘｰﾋﾟﾝｸﾞﾌｪｽｸ、ﾚｯﾄﾞﾌｪｽｸ	B
	セイヨウコウボウ		B
	シラゲガヤ	ﾍﾞﾙﾍﾞｯﾄｸﾞﾗｽ、ﾖｰｸｼｬｰﾌｫｯｸﾞ	B
	ヤバネオオムギ	ｻﾅﾀﾞﾑｷﾞ	B

科　　名	種　　名	異　　名	ｶﾃｺﾞﾘｰ区　分
イネ	ホソノゲムギ	ﾘｽﾉｼｯﾎﾟ	B
	ムギクサ		B
	オオムギ	ﾖﾚﾂｵｵﾑｷﾞ	B
	ネズミホソムギ		B
	ネズミムギ	ｲﾀﾘｱﾝﾗｲｸﾞﾗｽ	A3
	ホソムギ	ﾍﾟﾚﾆｱﾙﾗｲｸﾞﾗｽ、ﾁｬﾋｷﾑｷﾞ、ﾗｲｸﾞﾗｽ	A3
	アマドクムギ		D
	ボウムギ	ﾄｹﾞｼﾊﾞ、ﾄｹﾞﾑｷﾞ	B
	ドクムギ		A3
	ハナクサキビ	ｷﾇｲﾄｸｻｷﾋﾞ	B
	オオクサキビ		B
	ニコゲヌカキビ		B
	クサヨシ	ﾘｰﾄﾞｶﾅﾘｰｸﾞﾗｽ、ﾎｿﾎﾞｸｻﾖｼ	A3
	カナリークサヨシ	ﾔﾘｸｻﾖｼ、ｶﾅﾘﾔｸｻﾖｼ、ｶﾅﾘｰｸﾞﾗｽ、ｶﾅﾘｰｻｰﾄﾞ	B
	ヒメカナリークサヨシ		B
	オオアワガエリ	ﾁﾓｼｰｸﾞﾗｽ、ﾁﾓｼｰ、ｷﾇｲﾄｿｳ	A3
	ムカゴイチゴツナギ		B
	コイチゴツナギ	ｶﾅﾀﾞﾌﾞﾙｰｸﾞﾗｽ	B
	ヌマイチゴツナギ		B
	ナガハグサ	ｴｿﾞﾅｶﾞﾊｸﾞｻ、ｹﾝﾀｯｷｰﾌﾞﾙｰｸﾞﾗｽ、ﾋﾛﾊﾉﾅｶﾞﾊｸﾞｻ、ﾎｿﾊﾞﾉﾅｶﾞﾊｸﾞｻ	A3
	オオスズメノカタビラ	ﾐｽﾞｲﾁｺﾞﾂﾅｷﾞ	A3
	ナギナタガヤ	ﾈｽﾞﾐﾉｼｯﾎﾟ、ｼｯﾎﾟｶﾞﾔ	D
	コムギ		B
	ミナトカラスムギ		B
	ヒロハウキガヤ		B
	イヌナギナタガヤ		B
ガマ	モウコガマ		B
カヤツリグサ	クシロヤガミスゲ		B
	アメリカヤガミスゲ		B
	カタガワヤガミスゲ		B
	ナガバアメリカミコシガヤ		D
イチョウ	イチョウ		B
スズカケノキ	モミジバスズカケノキ	ﾌﾟﾗﾀﾅｽ	B
ﾌｳﾁｮｳｿｳ	セイヨウフウチョウソウ	ｸﾚｵﾒ、ｸﾚｵﾒｿｳ、ﾊﾘﾌｳﾁｮｳｿｳ	B
ブナ	アカナラ		B
マツ	ヨーロッパトウヒ	ﾄﾞｲﾂﾄｳﾋ	B
	ストローブマツ		B
	ヨーロッパアカマツ	ｵｳｼｭｳｱｶﾏﾂ	B
ミズアオイ	ホテイアオイ		A3
リンドウ	ベニバナセンブリ		B

（イ）国内外来種（４９種）

科　　名	種　　名	異　　名	ｶﾃｺﾞﾘｰ区　分
マツ	カラマツ		B
	チョウセンゴヨウ	ﾁｮｳｾﾝﾏﾂ	B
カバノキ	オオバヤシャブシ		B
タデ	イタドリ		A3
ナデシコ	マツモトセンノウ	ﾏﾂﾓﾄ	D
メギ	バイカイカリソウ		B
	メギ		B
ドクダミ	ドクダミ		A3
ウマノスズクサ	フタバアオイ	ﾌﾀﾊﾞｻｲｼﾝ､ｶﾓｱｵｲ	B
アブラナ	ワサビ		B
ユキノシタ	ウツギ	ｳﾉﾊﾅ	B
バラ	ヤマブキ		B
マメ	ニワフジ	ｲﾜﾌｼﾞ	B
	マルバハギ		A3
	ミヤギノハギ		B
	フジ	ﾉﾀﾞﾌｼﾞ	A3
ブドウ	ヤブガラシ	ﾋﾞﾝﾎﾞｳｶｽﾞﾗ	B
スイカズラ	ハコネウツギ		B
キキョウ	ソバナ	ﾏﾙﾊﾞｼｬｼﾞﾝ	B
	ホタルブクロ		B
キク	ヨモギ	ｶｽﾞｻﾖﾓｷﾞ	A3
	ヒメヨモギ		A3
	ヤブヨモギ	ﾌﾞﾝｺﾞﾖﾓｷﾞ	A3
	ユウガギク		B
	キクタニギク	ｱﾜｺｶﾞﾈｷﾞｸ､ｱﾌﾞﾗｷﾞｸ	B
	フキ	ｷｮｳﾌﾞｷ	B
	ミヤコワスレ	ﾐﾔﾏﾖﾒﾅ、ﾉｼｭﾝｷﾞｸ	B
ユリ	ニラ		B
	クサスギカズラ	ﾃﾝﾓﾝﾄﾞｳ	D
	ヤマユリ		B
	ヤブラン		B
	コオニユリ	ｱｶﾋﾗﾄﾕﾘ	B
ヒガンバナ	キツネノカミソリ		D
イネ	アズマネザサ		B
	ヒエ		D
ケシ	タケニグサ	ﾁｬﾝﾊﾟｷﾞｸ	B
バラ	ニガイチゴ		B
	シモツケ		B
ムラサキ	キュウリグサ		B
ナス	ヒヨドリジョウゴ		B
ニレ	ケヤキ		B
キンポウゲ	セリバオウレン		B
	ミヤマオダマキ		B
	キクバオウレン		B
ミツガシワ	アサザ		B
アカネ	ヘクソカズラ	ﾔｲﾄﾊﾞﾅ	B
ゴマノハグサ	ムシクサ		B
スギ	スギ		A3
ミソハギ	ミソハギ		B

（ウ）不明（４種）

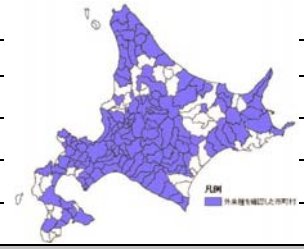
科　　名	種　　名	異　　名	ｶﾃｺﾞﾘｰ区　分
タデ	ホソバタデ	ｻﾂﾏﾀﾃﾞ	D
	フイリオオイタドリ		B
キンポウゲ	オダマキ		D
イネ	スズメノチャヒキ		B

(4)選定種の解説

ここでは、代表的な例を8種掲載している。全種の解説は、ホームページに掲載する。

①アライグマ(哺乳類)

哺乳類	国外外来種
アライグマ	
分類	
目名	ネコ目
科名	アライグマ科
種名(亜種名:*)	アライグマ
学名	*Procyon lotor*
カテゴリー(北海道)	■A1/□A2/□A3/□B/□C/□D/□E/□h/□K
カテゴリー(環境省)	■特定外来生物/□要注意外来生物
カテゴリー(日本生態学会ワースト100)/(IUCN世界の侵略的ワースト100)	■日本の侵略的ワースト100/□世界の侵略的ワースト100
導入の経緯	
原産地	カナダ南部からメキシコ北部にかけて広く分布
導入年代	不明
初報告	1992年(*1)
全国分布	47都道府県
道内分布	133市町村(平成22年4月現在)
導入の原因	飼育個体の逃亡・遺棄
種の生態学的特性	
生活史型	メスは発情期になると、通常2～6個体と交尾する乱婚性の特徴をみせる(*10)。オスは交尾を終えると1～3日はメスと行動を共にするが、その後は完全に別行動をとり、子育てには参加しない(*11)。出産性比は、一般的に個体数が安定している地域では、ほぼ1対1になるが(*11,13)、急増中の個体群の場合、メスの比率が高くなることも報告されている(*15)。
形態	体型には性的二型があり、全体的にオスが大型である。体重: 3.6～9.0kg、全長:オス63.4～105.0cm、メス60.0～90.9cm、尾長:オス20.0～40.5cm、メス19.2～34.0cm(*16)
繁殖形態	2～3月に交尾期を迎え(*11)、54～70日の妊娠期間を経て(*15,16)、平均3～4頭の子を出産する(*11)。メスの妊娠率は当歳個体で0～73%、2歳以上の個体で68～100%(*11)。1歳前死亡率は35%～48%程度と比較的低い(*12)。出産は早いもので4月に始まり, 6月上旬頃までに終わるのが一般的なパターンであるが(*11)、繁殖に失敗したメスの中には、同じ年のうちに2度目の発情期がくることもある。
生息環境	通常、餌や水資源、巣環境などの整った地域に定住する複数のメスを単独のオスが囲う形で行なわれるため(*14)、一般的には湿潤で水資源の豊富な森林環境を中心に分布が広がる傾向が強い(*15,16)。しかし、一定の水資源さえ確保できれば, 本来は生息不適地である乾燥地帯や都市部まであらゆる環境に適応する力を持っており(*15,16)、日本においても、北海道の牧場地帯から、鎌倉や大阪などの都市域まで全国に広く定着が確認されている(*6)。
特記事項	夜行性、半冬眠、木登りが得意で大径木の樹洞などを好んで利用する(*15,16)。
影響	
被害の実態・おそれ ①生態系にかかる影響 ②農林水産業への影響 ③人の健康への影響	 ①直接捕食による鳥類や小型の哺乳類、魚類、両生爬虫類、昆虫類、甲殻類などへの影響(*2,5,8)、感染症の伝播(*3,9)、在来種との競合(*4) ②トウモロコシやイチゴ、メロン、スイカなど農作物の食害、養鶏場、養魚場における食害(*2) ③原産国では、狂犬病、アライグマ回虫症の媒介者として有名(*3)
被害をもたらしている要因 ①生物学的要因 ②社会的要因	 ①天敵の不在、雑食性、高い繁殖能力、樹上性、半冬眠 ②テレビアニメによる一大ペットブームの到来と同時多発的な遺棄、放逐の発生(*6)
特徴並びに近縁種、類似種	5本の独立した肢指、蹠行性、眉間の黒い線、耳の縁取りが白い、はっきりとした白いヒゲが特徴(*17)。タヌキ、ハクビシンなどと見間違えられることが多い。
対策	平成6年より狩猟獣に指定。平成10-11年に「アライグマ被害対策検討協議会」、平成11-13年に「アライグマ対策検討委員会」を設置するとともに調査研究を進め、平成15年度より「北海道アライグマ対策基本方針」を定め、排除を進めている。また、「北海道動物の愛護及び管理に関する条例」でアライグマを特定移入動物に指定し、新たなアライグマの侵入予防をはかっている。(特定外来生物指定後に解除)特定外来生物(2005.6.1)
その他の関連情報	特になし
分布図	■有り/□無し
写真/イラスト	■有り/□無し
備考	
参考文献(省略、ホームページで全文献名掲載)	



②ミンク（哺乳類）

哺乳類	国外外来種
ミンク	
分類	
目名	ネコ目
科名	イタチ科
種名（亜種名：*）	ミンク
学名	*Neovison vison*
カテゴリー（北海道）	■A1/□A2/□A3/□B/□C/□D/□E/□h/□K
カテゴリー（環境省）	■特定外来生物/□要注意外来生物
カテゴリー（日本生態学会ワースト100）／（IUCN世界の侵略的ワースト100）	□日本の侵略的ワースト100/□世界の侵略的ワースト100
導入の経緯	
原産地	アメリカ合衆国西南部以南を除く北アメリカ一帯（アラスカ、カナダを含む）(*5)
導入年代	昭和3年11月に農林省がアメリカ合衆国から北海道に4頭を輸入したのが最初。野生化の正確な時期は不明だが、1953年から始まった本格的な飼育事業の発展に伴い、遺棄や逃亡による野生化が始まり、1960年代中頃には定着したと考えられる(*5)。
初報告	1982年(*1)
全国分布	北海道、栃木県、長野県、福島県、新潟県（新聞報道など）
道内分布	全道に分布するが、海岸部をはじめとする水辺に多く、山地にはほとんど生息しない。
導入の原因	毛皮養殖用飼育個体の逃亡・遺棄
種の生態学的特性	
生活史型	母子関係は2ヶ月あまり続き、子は秋までに成体と同サイズとなるが、0才、1才の生存率は著しく低いものと予想される。
形態	頭胴長：オス355-440mm、メス325-387mm、尾長：オス360mm、メス300mm、体重：オス655-1580g、メス360-877g(*4,5)。毛色は通常は黒いが、飼育技術によって、プラチナ、バイオレット、パステルなどの毛色タイプに区分されている。
繁殖形態	飼育下では晩秋に交尾し、翌春に4～5頭の子を出産(*4)。野生化個体の資料からは、3月頃に交尾して5月中・下旬に5～7頭の子を出産すると推定される。メスの繁殖率は高く、成体は毎年繁殖すると推定される。
生息環境	河辺ヤナギ林や湿地林を中心とする森林・ササ植生・水田。水辺を好む。
特記事項	特になし
影響	
被害の実態・おそれ ①生態系にかかる影響 ②農林水産業への影響 ③人の健康への影響	 ①直接捕食によるノネズミ、鳥類、魚類、両生類、甲殻類への影響(*2,3,4,5) ②養鶏、養魚場における食害 ③不明
被害をもたらしている要因 ①生物学的要因 ②社会的要因	 ①競合する可能性のあった在来の近縁種であるニホンカワウソの絶滅 ②1953年から本格化した毛皮目的の増殖事業(*5)
特徴並びに近縁種、類似種	同じく外来種であるニホンイタチと営巣場所や餌をめぐる競合関係があると予想される。ミンクが水系に強く執着するのに対し、ニホンイタチは水辺から山間部まで多様な環境に生息できる(*4)。
対策	平成6年より狩猟獣指定
その他の関連情報	1920年の記録を最後に絶滅したと言われているニホンカワウソの目撃情報が続いた1970年代のいわゆる「カワウソ騒動」は、野生化したミンクの誤認であったと考えられている(*5)。
分布図	■有り/□無し
写真／イラスト	■有り/□無し
備考	
参考文献(省略、ホームページで全文献名掲載)	

③ブラウントラウト（魚類）

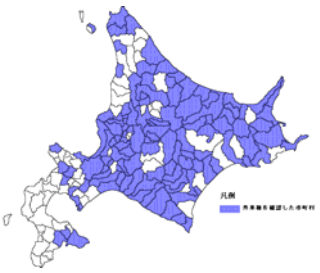
魚類	国外外来種
ブラウントラウト	
分類	
目名	サケ目
科名	サケ科
種名（亜種名：*）	ブラウントラウト
学名	*Salmo trutta*
カテゴリー（北海道）	■A1/□A2/□A3/□B/□C/□D/□E/□h/□K
カテゴリー（環境省）	□特定外来生物/■要注意外来生物
カテゴリー（日本生態学会ワースト100）／（IUCN世界の侵略的ワースト100）	■日本の侵略的ワースト100 /■世界の侵略的ワースト100
導入の経緯	
原産地	ヨーロッパからアラル海を含む西アジア
導入年代	1877年～1926年のいずれか
初報告	1980年
全国分布	北海道、神奈川県、長野県、山梨県、栃木県、群馬県など10都道県
道内分布	ほぼ道内全域
導入の原因	はじめニジマスあるいはカワマス卵に混入して移入、のちに釣り対象魚として放流された。
種の生態学的特性	
生活史型	淡水型、遡河回遊型
形態	頭部は扁平し、尾柄は太い。背側は黄土色に近い茶色で、頭部から背部には薄い色で縁取られた大きな黒点が散在し、側線付近を中心に、白く縁取られた朱点が散在する。但し、大型の個体では、朱点を欠くものもある。降海型では、体側が銀白色、背部は青みがかる。一般にニジマスより成長速度は遅いといわれており、河川型では1、2、3、4年でそれぞれ9、19、26、31cmとなる。降湖型は大型魚が多数確認されており、支笏湖では90cmを超えるものも釣られている。また、カスピ海では125ポンド(56.6kg)に達するものも記録されている。魚食性が強く、昆虫から甲殻類、他の小魚をよく捕食する(*1)。
繁殖形態	多回産卵型。本道での産卵期は12～3月。河川上流の淵尻から瀬頭への移行帯の浅い砂礫底に産卵床をつくる(*2)。
生息環境	河川の上流から中流と自然湖、人工湖および沿岸海域。降海型は、定置網で相当数が捕獲されていることから、沖合いには出ず、沿岸回遊していると考えられる。
特記事項	非常に魚食性が強い。北米同様、本道においても降海型が母川以外に遡上し、生息域を拡大していることが確認されている(*4)。
影響	
被害の実態・おそれ ①生態系にかかる被害 ②農林水産業への影響 ③人の健康への影響	①1)採餌をはじめとするニッチの争奪により、種間競争が発生する。2)産卵床の競合で、在来種の生存率を低下させるおそれがある。3)強い魚食性のため、在来の水圏生物に対し、上位捕食者として直接的な影響を与える。4)上記の事象に加え、母川以外の河川にも容易に遡上し、環境適応度も高いため、結果として在来魚との置換が発生する。5)秋田県では、在来イワナとの属間交雑の報告もある。6)日高地方のある湖沼では、ニホンザリガニへの捕食圧が問題視されている(*6)。 ②サクラマス(ヤマメ)やシロサケ稚魚の捕食など(*1,2)。 ③不明
被害をもたらしている要因 ①生物学的要因 ②社会的要因	①1)在来種であるサクラマス(ヤマメ)やアメマス(イワナ)と同様の環境で、それらより後に産卵するため。2)採餌をはじめとするニッチが在来種と競合するため(*1,2,3)。母川回帰性が弱く、一旦海洋に出ると、近傍の母川以外の近傍の河川にも遡上、繁殖するため(*4,5)。 ②遊魚対象として人気が高く、北海道内水面漁業調整規則の移殖放流禁止対象魚指定以前は、多くの水系に放流されていたため。
特徴並びに近縁種、類似種	大型個体はニジマスに似るが、体側の紅色縦帯がないことや、尾びれの黒点がないか少ないことで区別できる(*1)。
対策	北海道内水面漁業調整規則の移殖放流禁止対象魚
その他の関連情報	アメリカ・コロラド川では、ねじれ病(Whiring Disease)の媒介主として問題となった。
分布図	■有り/□無し
写真／イラスト	■有り/□無し
備考	
参考文献(省略、ホームページで全文献名掲載)	

④ブルーギル（魚類）

魚類	国外外来種
ブルーギル	
分類	
目名	スズキ目
科名	サンフィッシュ科
種名（亜種名：*）	ブルーギル
学名	*Lepomis macrochirus*
カテゴリー（北海道）	■A1/□A2/□A3/□B/□C/□D/□E/□h/□K
カテゴリー（環境省）	■特定外来生物/□要注意外来生物
カテゴリー（日本生態学会ワースト100）／（IUCN世界の侵略的ワースト100）	■日本の侵略的ワースト100 /□世界の侵略的ワースト100
導入の経緯	
原産地	五大湖からアメリカ合衆国東部を経てメキシコ北東部
導入年代	本州では1960年
初報告	1995年
全国分布	全国
道内分布	函館市五稜郭公園濠(*1)
導入の原因	日本へは1960年に養殖魚として導入されたが、 現在では養殖されていない。 北海道にも養殖魚として導入されたが、定着しなかった。 その後、遊漁者による放流と他の放流魚への混入により 分布が拡大した。 北海道での分布は公園の池であり、移入の原因は不明(*1,2)。
種の生態学的特性	
生活史型	淡水型
形態	体は著しく扁平し、体高は高い。口は小さく、鰓蓋後部に名前の由来となる濃紺の斑紋がある。ふつう全長20cm、最大40cmに達する。植生は雑食性で、水生植物から小魚まで捕食する(*2)。
繁殖形態	産卵期は日本では5～9月。22℃～29℃で産卵する。雄は水底にすりばち状の巣をつくり、産卵受精後は雄が卵から稚魚まで保護する。産卵床を守るオスはなわばりをもつが、ひとつひとつの範囲は狭い。しかし、それらが寄り集まってコロニーを形成する（*2）。
生息環境	湖沼や河川の流れのゆるやかで水草のあるところを好む(*2)。
特記事項	特になし
影響	
被害の実態・おそれ ①生態系にかかる影響 ②農林水産業への影響 ③人の健康への影響	 ①小型魚類や甲殻類から水生植物に至る在来生物を捕食し、駆逐する（*2）。 ②不明 ③不明
被害をもたらしている要因 ①生物学的要因 ②社会的要因	 ①本種は、食餌資源ニッチに幅があり、環境適応度が高い。繁殖力も旺盛で、成熟期間は1年と短い(*2)。 ②本道への導入経緯は不明だが、他の地域では、1970年代まで食用として公的機関による養殖実験放流が行われていたことに由来する。
特徴並びに近縁種、類似種	同じサンフィッシュ科のオオクチバスに比べ、体調ははるかに小さく、名前の由来となった濃紺の斑紋によって、容易に判別が可能(*2)。
対策	2009年現在、北海道水産孵化場・工藤智氏らのグループによって、電気ショッカーボートを用いた駆除研究事業が継続されている(*1)。北海道内水面漁業調整規則の移殖放流禁止対象魚。
その他の関連情報	特になし
分布図	■有り/□無し
写真／イラスト	■有り/□無し
備考	
参考文献(省略、ホームページで全文献名掲載)	

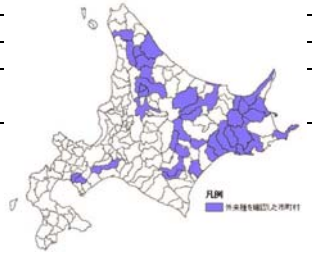
⑤セイヨウオオマルハナバチ（昆虫）

昆虫類	国外外来種
セイヨウオオマルハナバチ	
分類	
目名	膜翅目
科名	ミツバチ科
種名（亜種名：*）	セイヨウオオマルハナバチ
学名	*Bombus terrestris*
カテゴリー（北海道）	■A1/□A2/□A3/□B/□C/□D/□E/□h/□K
カテゴリー（環境省）	■特定外来生物/□要注意外来生物
カテゴリー（日本生態学会ワースト100）/（IUCN世界の侵略的ワースト100）	■日本の侵略的ワースト100/□世界の侵略的ワースト100
導入の経緯	
原産地	ヨーロッパ(オランダまたはベルギー)
導入年代	本州では1991年(*1)
初報告	1996年日高にて自然巣を発見
全国分布	27都道府県(*1)
道内分布	118市町村（2010年3月現在）で確認(*2)
導入の原因	ビニールハウス内での花粉の受粉のために導入
種の生態学的特性	
生活史型	完全変態
形態	胸部・腹部のそれぞれが鮮やかな黄色と黒の縞模様で、腹部第5節から先端までは白色。この斑紋は、女王バチ、働きバチ、雄バチでほとんど変わらない。花蜜を餌とし、蜜源植物の対象は広い。但し、中舌が短いため、蜜源が深い花の場合、根元に穴を開けて蜜を吸う盗蜜を行う(*1)。
繁殖形態	土中で営巣して大きなコロニーを作る。新女王が越冬。
生息環境	やや開けた草地や林間など
特記事項	特になし
影響	
被害の実態・おそれ ①生態系にかかる影響 ②農林水産業への影響 ③人の健康への影響	 ①盗蜜によるエンゴサク類の種子生産阻害や在来マルハナバチとの交雑による生殖攪乱のおそれ。ポリプダニ媒介による在来マルハナバチの駆逐(*1) ②不明 ③刺傷
被害をもたらしている要因 ①生物学的要因 ②社会的要因	 ①エンゴサク類等野生植物の種子生産阻害は、本種が短舌であるため、花弁の脇に穿孔することによる。在来種オオマルハナバチとは、すでに交雑が確認されている。本種に寄宿するポリプダニはヨーロッパ系統であり、在来マルハナバチは耐性が備わっていない可能性がある。また、マルハナバチ属は有毒の刺針を持つため、刺された場合は痛み、腫れ等の症状を引き起こす。 ②トマトを中心とした受粉用に短期間のうちに大量に導入されたことによる(*1)。
特徴並びに近縁種、類似種	道東にのみ生息するノサップマルハナバチと酷似する(*1)。
対策	駆除事業およびボランティアによる捕殺が実施されている。また、現在は受粉用に本種を用いる場合は、定められた設備を設置した上で、環境省の許認可を受けることが義務づけられた。なお、本州では外来生物法施行以降は、本種に代わりクロマルハナバチ（国内外来種）の利用に置き換わりつつある(*1)。
その他の関連情報	環境省、保全生態学研究会（代表：東京大学 鷲谷いずみ教授）と連携し生息情報収集を継続中(*2)
分布図	■有り/□無し
写真／イラスト	■有り/□無し
備考	
参考文献(省略、ホームページで全文献名掲載)	



⑥ウチダザリガニ（昆虫以外の無脊椎動物）

昆虫以外の無脊椎動物	国外外来種
ウチダザリガニ	
分類	
目名	十脚目
科名	ザリガニ科
種名（亜種名：*）	ウチダザリガニ
地方名	タンカイザリガニ
学名	*Pacifastacus leniusculus*
カテゴリー（北海道）	■A1/□A2/□A3/□B/□C/□D/□E/□h/□K
カテゴリー（環境省）	■特定外来生物/□要注意外来生物
カテゴリー（日本生態学会ワースト100）／（IUCN世界の侵略的ワースト100）	■日本の侵略的ワースト100/□世界の侵略的ワースト100
導入の経緯	
原産地	北アメリカ　コロンビア
導入年代	1930年7月25日
初報告	1953年
全国分布	北海道、福島県、滋賀県、長野県。最近になり千葉県でも発見され、調査が進められている。
道内分布	中川町、北見市、清里町、標津町、枝幸町、置戸町、根室市、釧路湿原、帯広市、豊頃町、摩周湖、屈斜路湖、阿寒湖、然別湖、支笏湖、洞爺湖。 近年になって北海道東部と北部を中心に急速に生息範囲を拡大している(*3)。
導入の原因	国内へは、食料増産を目的として政府が公式に輸入した例がある。日本全国の水産試験場に配布された(*2,3)。その他、研究用に持ち込まれたものや商社が産業目的で輸入・販売したケースなど、背景は多様（*3)。北海道では、食料増産を目的として正式に放流された(*3)。当初、摩周湖のみに定着したが、摩周湖から持ち出された個体の密放流により分布を拡大したとされる(*2)。
種の生態学的特性	
生活史型	孵化後2～3年で成熟し、寿命は5～6年(*2,3)
形態	最大で全長15cm程度に成長し、ニホンザリガニを食べる(*2)。
繁殖形態	北海道での交尾期は初雪の頃（10～11月）。その数週間後に産卵が始まる。メスは腹部に卵を抱えたまま越冬し、翌年の初夏に卵が孵化する。卵数は数百(*3)
生息環境	冷水性の河川や湖沼。ただし音更町では、温泉水が流入する高水温性の小河川にも定着し、アメリカザリガニと共存していることが確認されている(*4)。
特記事項	随伴生物として甲殻類の1種とヒルミミズ類の1種が確認されている。 摩周湖のニジマス（外来生物）の胃にウチダザリガニが詰まっていたという報告があり、ニジマスの餌資源になっていると考えられる(*3)。同様に、外来種であるミンクやアライグマがウチダザリガニを食べていたという目撃例がある(*3)。
影響	
被害の実態・おそれ ①生態系にかかる影響 ②農林水産業への影響 ③人の健康への影響	①在来種ニホンザリガニとの競合 捕食者として湿原生態系などの在来生態系を撹乱している可能性が高い(*1,3)。ミズカビ病（ザリガニペスト）を媒介し、在来種に感染させる可能性がある。国外で行われた室内実験では、日本固有のニホンザリガニがミズカビ病に感染すると100%致死することが明らかになっている(*5)。阿寒湖では国指定の天然記念物であるマリモに穴を開けるなどの被害も確認されている(*2)。 ②不明 ③不明
被害をもたらしている要因 ①生物学的要因 ②社会的要因	①水温変動や汽水環境にも耐性がある(*1)。北海道の千島火山帯に属するあたりには水温が低いカルデラ湖が多く存在し、本種の原産地（北米のコロンビア川水系）にある湖と似た環境になっている（*3）。 ②分布拡大の一番の要因として、人為的な放流があげられる（*1,2,3)。その背景は、ウチダザリガニというザリガニ自体を知らない市民が多いことに加えて、ニホンザリガニとウチダザリガニの小型個体が形態的に比較的良く似ているため、特に児童がウチダザリガニをニホンザリガニと誤認して捕獲・飼育し、再放流してしまうことにある(*1)。
特徴並びに近縁種、類似種	はさみの付け根にある白い部分で信号を送っているように見える。額角は鋭く尖り、体はがっしりしている。体色は緑褐色または茶褐色、青褐色など(*2)。淡海湖の個体群は別亜種タンカイザリガニとして扱われてきたが、現在は同種と見なされている(*2,3)。
対策	放流禁止の法整備、放流の危険性に関しての普及・啓発。国などによる捕獲調査。市町村等を対象とした捕獲カゴの貸出(北海道)。 放流防止には教育現場での啓発が必要で、教科書の副読本等で取り上げる必要がある(*1)。
その他の関連情報	北アメリカのカリフォルニア州南部やヨーロッパでもウチダザリガニが導入され、在来生態系へ影響を及ぼす深刻な問題を引き起こしている。
分布図	■有り/□無し
写真／イラスト	■有り/□無し
備考	本種は岩内町、千歳市にも導入されたが現在は分布が見られない。亜種の分類が混乱している。 原産地である北米では当初、北海道に導入されたウチダザリガニと滋賀県に導入されたタンカイザリガニ(滋賀県の淡海池に分布するものはタンカイザリガニと呼ばれる。)は別の種とされていた。その後、分類学的な認識が変わり、今では両者は同じ種類とされている。現在も、ウチダザリガニ、タンカイザリガニの名称はそのままに用いられている。分類学的な扱いに関しては、まだ解決されていない部分も多く残されているが、原産地では数が減って稀少になり、分類学上の標本集めも難しくなっている（*3）。
参考文献(省略、ホームページで全文献名掲載)	



⑦オオハンゴンソウ（植物）

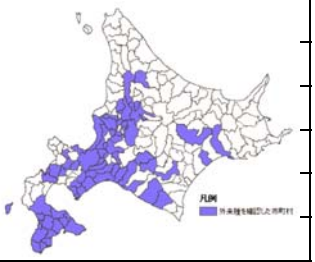
植物	国外外来種
オオハンゴンソウ	
分類	
科名	キク科
種名（亜種名：*）	オオハンゴンソウ
学名	*Rudbeckia laciniata* L.
英名	Cutleaf coneflower
異名	
カテゴリー（北海道）	□A1/■A2/□A3/□B/□C/□D/□E/□h/□K
カテゴリー（環境省）	■特定外来生物/□要注意外来生物
カテゴリー（日本生態学会ワースト100）/IUCN世界の侵略的ワースト100）	□日本の侵略的ワースト100/□世界の侵略的ワースト100

導入の経緯	
原産地	北アメリカ
導入年代	明治
初報告	十勝(1975)（ハナガサギク）
全国分布	北海道～九州
道内分布	全道各地
導入の原因	明治中期に観賞用として導入され、逸出

種の生態学的特性	
生活史型	多年草
形態（高さ、特徴など）	100-250cm
開花時期	8-9月
生息環境	道端、河川沿い、湿った牧草地など
特記事項	温帯に分布。頭状花。虫媒花。多年生草本。地下茎から茎を束生し、上部で枝分かれする。
影響	
被害の実態・おそれ ①生態系にかかる影響 ②農林水産業への影響 ③人の健康への影響	 ①国立公園の湿原や河畔林といった自然度の高い環境に定着し、湿原の植物などの貴重な在来植物との競争、駆逐が懸念されている。 ②不明 ③不明
被害をもたらしている要因 ①生物学的要因 ②社会的要因	 ①道端、畑地、湿原、河原など肥沃で湿った場所に、地下茎から茎を束生し、大群落を作る。 ②不明
特徴並びに近縁種、類似種	ワイルドフラワー緑化の材料として使われていた。種間交配などで育成された園芸品種が多く、ルドベキアの総称で流通していたものもある。オオハンゴンソウ属は世界で約30種が知られる。日本に自生種はない。本種以外にアラゲハンゴンソウ（キヌガサギク）、オオミツバハンゴンソウ（ミツバオオハンゴンソウ）などの野生化が確認されている。
対策	計画的な防除として、引き抜きにより採取し、適切に処分する。登別市のキウシト湿地は、ワラミズゴケ、ツルコケモモ、モウセンゴケなどの貴重な湿原植生がみられ、日本の重要湿地500に選定されている。1997年に確認されたオオハンゴンソウの勢力が広がり在来種にとって深刻な状況であるため、駆除が行われている。寒冷地に生育でき、大雪山国立公園の周辺部にも侵入している。札幌市円山、北海道大学構内、雨竜沼登山道、利尻島、支笏湖、旭川市などの各地で駆除活動が盛んに行われている。
その他の関連情報	特になし
分布図	■有り/□無し
写真／イラスト	■有り/□無し
備考	
参考文献(省略、ホームページで全文献名掲載)	

⑧ブタクサ（植物）

植物	国外外来種
ブタクサ	
分類	
科名	キク科
種名（亜種名：*）	ブタクサ
学名	*Ambrosia artemisiifolia* L.
英名	Common ragweed
異名	
カテゴリー（北海道）	□A1/■A2/□A3/□B/□C/□D/□E/□h/□K
カテゴリー（環境省）	□特定外来生物/■要注意外来生物
カテゴリー（日本生態学会ワースト100）/IUCN世界の侵略的ワースト100）	□日本の侵略的ワースト100/□世界の侵略的ワースト100
導入の経緯	
原産地	北アメリカ
導入年代	戦前
初報告	不明
全国分布	北海道～沖縄
道内分布	南西部に多い
導入の原因	作物、芝生種子などに混入し、移入
種の生態学的特性	
生活史型	一年草
形態（高さ、特徴など）	30-60cm
開花時期	7-9月
生息環境	畑地、牧草地、空地、道端、河川敷など
特記事項	温帯～熱帯に生育する。窒素分の多い酸性土壌を好む雌雄同株。風媒花。種子生産量は32,000～62,000個/株。発芽には10～40℃の恒温よりも10℃/30℃の変温が適。発生深度は2.5～15.5cm。土中種子の寿命は39年以上。PH6～7で生育良好。 総苞に包まれた痩果（偽果）をつくる。
影響	
被害の実態・おそれ ①生態系にかかる影響 ②農林水産業への影響 ③人の健康への影響	①上高地への侵入がみられ、特に注意を要する種とされている。天竜川では代表的な外来植物の一つとなり、他の外来植物とともに、固有種などの在来種と競合し、駆逐するおそれが指摘されている。 ②世界的にみられる畑地・牧草地の雑草である。 ③花粉症の原因植物である。1969年に世田谷区が小児ぜんそくの原因花であると発表した。アメリカ合衆国やカナダでは、花粉症対策の研究や防除のために、国家的な規模で多額の研究資金が使われている。花粉症の人はブタクサが少ない地域に移住するという。抜き取りや刈り取りで防除が行われるが、除草剤（アトラジン）抵抗型があるとされる。ブタクサを食害するブタクサハムシが1996年に千葉県で確認されて以来、全国に急速に広まった。韓国では輸入禁止植物とされている。
被害をもたらしている要因 ①生物学的要因 ②社会的要因	①土壌の種類や水分に対する適応性は大きい。種子生産量は32,000～62,000個/株と多い。土中種子の寿命は39年以上と長い。痩果（偽果）は、雨、鳥、人間など様々な手段により伝播される。アレロパシー作用に関する研究が行われている。 ②不明
特徴並びに近縁種、類似種	ブタクサ属は世界に25種ある。日本には自生種はない。オオブタクサ（クワモドキ）、ブタクサモドキが野生化。変異が多く、ウスゲブタクサ（ケナシブタクサ）、ケブタクサ（ビロードブタクサ）の2型があるとされるが、中間型も存在する。神奈川県横浜市では、雄性の頭花がなく、頂生の花序も全て雌性の頭花になったメブタクサの記録がある。オオブタクサとの雑種オニブタクサ（A. ×helenae）がある。
対策	侵入経路や分布拡大のメカニズムを把握し、効果的な防除方法や分布拡大の抑制策の検討が望まれる。既に各地で定着しているが、希少種等との競合・駆逐等のおそれがある場合には、積極的な防除または分布拡大の検討が望まれる。
その他の関連情報	旭川市の周辺河川敷では雪捨て場で大発生が確認されている。（旭川の帰化植物）
分布図	■有り/□無し
写真／イラスト	■有り/□無し
備考	
参考文献(省略、ホームページで全文献名掲載)	



外来生物被害予防３原則

１　入れない
　悪影響を及ぼすかもしれない外来生物をむやみに日本に入れない。
２　捨てない
　飼っている外来生物を野外に捨てない。
３　拡げない
　野外にすでにいる外来生物は、他地域に拡げない。

外来種を含め野生生物を捕獲等する場合は、主務官庁の許可が必要な場合があります。

北海道の外来種リスト

－北海道ブルーリスト２０１０－

ホームページアドレス　：　http://bluelist.ies.hro.or.jp

問合せ先：北海道環境生活部環境局自然環境課特定生物グループ
電話番号：０１１－２３１－４１１１（内線２４－３８７）
ＦＡＸ番号：０１１－２３２－６７９０
Eメールアドレス：kansei.shizen1@pref.hokkaido.lg.jp